

地

域

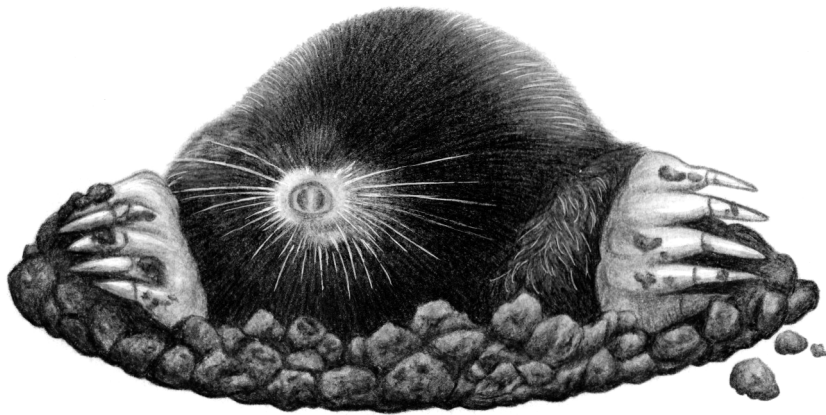
交

流

研

究

年報第18号



Aimi.W

都留文科大学地域交流研究センター

2021年度

地域交流研究

2021 年度
年報 第 18 号

目次

— 2021 年度（令和 3 年度）活動報告 —

I. 2021 年度の活動について〔概況〕	2
II. 各部門の活動	4
II-1. 自然共生研究部門	
II-2. 共生教育研究部門	
II-2-1. 地域美術教育	
II-2-2. 地域インクルーシブ教育	
II-2-3. 社会教育	
II-3. まちづくり研究部門	
III. インターフェイスとメディアの活動	31
III-1. 第 17 回地域交流研究フォーラムの開催	
III-2. 各種講座の開催	
III-2-1. 都留文科大学現職教職員教育講座	
III-2-2. 都留文科大学子ども公開講座	
III-3. 学部共通科目の開講	
(1) 「地域交流研究Ⅰ」	
(2) 「地域交流研究Ⅱ」	
(3) 「地域交流研究Ⅲ」	
(4) 「地域交流研究Ⅳ」	
IV. 地域貢献活動	54
IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム	
IV-2. 都留市放課後子ども教室事業	
IV-3. 文大ボランティアひろば	
IV-4. 地域交流研究センターサテライト	
IV-5. 学級づくりの向上をめざす実践講座	
IV-6. 市民公開講座	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	68
V-1. 食育つる推進プラン	
V-2. 谷ニラボ	

活動報告

2021年度

活 動 報 告

2021 年度（令和 3 年度）

I. 2021 年度の活動について [概況]

地域交流研究センター（以下、センターと記す）は、2003 年 4 月に創設され、本年度で発足から 19 年目を迎えた。

センター発足以前から、本学では長い時間をかけた地域との交流や、学生、教職員、市民との協働によるさまざまな実践が活発に行われてきた。こうした地道な取組の蓄積を基盤として現在のセンターの豊かな諸活動が展開されている。

センターの発足時に確認した諸活動の基本的な考え方は次の 3 点である。

- ① 大学に対する地域の要請に、本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと
- ② 地域性や実践性の問われる本学の研究・教育の一環として、地域（現場）に赴き、「課題」と取り組む地域の人びとと共同して活動を展開させること
- ③ これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うこと

こうした基本的な考え方は、センターの各部門の活動や共通教育科目の「地域交流研究 I～IV」、市民公開講座、地域貢献活動等に反映されている。また上記の①～③の考え方は、センターが単に地域との交流を促進する機関ではなく、地域との交流のあり方を本学の研究や教育の側面から捉え直し、市民と協働して活動を展開させるセンター、つまり「地域交流センター」ではなく「地域交流研究センター」であることの根拠となっている。

本学の研究・教育の特色を活かした地域貢献活動を充実させるために、センターには、現在、「自然共生研究部門」、「共生教育研究部門」、「まちづくり研究部門」、「グローバル交流研究部門」を置き活動している。この 4 つの部門では私たちの暮らしや自然との共生のありかたなど地域の現代的な課題に応じて、自然科学や人文・社会科学といった領域を総合して取り組んでおり、センターの内実を形づくっている。それとともに、地域を担う次代の主体を育成することを目的としたさまざまな教育・研究活動を行っている。学科や学年に関係なく参加できる事業が多いこともセンター活動の特徴である。センター事業のなかには、長期に渡って継続している事業もあれば、あらたに始められた事業もある。また事業化に向けて研究を進めている活動もある。こうした多彩な諸活動がセンターの事業の魅力でもある。

2021 年度は、昨年度（2020 年度）同様に新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、年度当初に予定していた活動を延期、もしくは中止せざるを得なかったものもある。しかし、本学の事業実施のガイドラインに照らし合わせたうえで、感染症対策を図り、個々の事業ごとに実施計画を立て、新型コロナウイルス感染症等対策本部に実施計画を諮るという手順を踏み、可能な限り事業を実施した。

センターには、先にも述べたように発足以前から地域との長い交流の歴史と教育、研究活動の蓄積がある。地域そのものを博物館に見立て、自然や文化に親しみ、じかに触れ、学び

を深めていこうとする「都留フィールド・ミュージアム」構想もその一つである。現在、全国の大学に地域貢献や大学資産の活用を目的とした大学博物館が設置されているが、地域全体を生きた学びの場として捉える「フィールド・ミュージアム」構想は他にない本学独自の構想である。このような構想をセンターとして大切に受け継ぎ、さらに発展させていきたい。次年度は、新棟などの対応もあり、ますますセンターの果たす役割が大きくなることが予想される。たえず発足の理念に立ち返りながら、2022年度は次の点に特に留意した取組を目指したい。

- a. ボランティア登録などを充実させ、学生の地域での交流・研究活動を支援する
- b. 本学の学生あるいは本学を目指す高校生にとって魅力ある科目群とするため、センターの理念に即した「地域交流研究」の科目群を再編する
- c. 「ニュースレター」の発行や表示看板の作成など、センターの考え方や魅力ある諸実践を学生、高校生に周知する広報活動を充実させる
- d. 都留市や企業などと連携した地域貢献活動をさらに推進させる
- e. センターに蓄積された資料が教員や学生に活用されるよう地域資料のアーカイブを充実させる
- f. 地域資料のアーカイブ化と併せて研究活動を推進する
- g. 新棟やキャンパスの自然を活用した市民講座等の開催を検討していく

今年度から20名近い教員にセンター活動に関わっていただけることとなった。各教員の持ち味を活かした魅力ある事業が期待される。その一方で、大学認証評価等で高い評価を受けている諸活動が、兼任教員のボランティアな精神と熱意とによって支えられている側面もある。「地域の大学」を掲げる本学の地域交流の実体に即して、兼任教員の負担をできる限り軽減できる環境の整備を検討しながら、センターの理念に相応しい豊かな地域貢献活動を展開していきたい。そのためには、全学の参加と協働が望ましい。そのために今後は、本学の各センターや各学科を結び、本学らしい実践を積み重ねていくことも重要な課題である。

センターの諸活動は、それを担当する教員の持ち味を活かし、地域の課題に応じて理系・文系の領域を統合して取り組むことや、本学の学科や学年の枠を超えて地域での交流による実地の生きた学びを経験し地域の次代を担う主体を育成することなども大きな目標としている。このような本学の地域貢献活動の意義や課題をつねに点検しながら「都留フィールド・ミュージアム」構想を推進していきたいと考えている。

Ⅱ. 各部門の活動

Ⅱ - 1. 自然共生研究部門

【2021年度（令和3年度）の活動概要】

2003年の地域交流研究センター（以下「センター」と記す）が発足すると同時に一部門として位置づけられたフィールド・ミュージアム部門は、センターの再編にともない、2019年度、「自然共生研究部門」と改称した。自然共生研究部門としての活動は2年目となるが、2003年以降の諸実践や考え方を受け継ぎながら活動している。この部門の担当は、北垣憲仁（地域交流研究センター教授）と内山美恵子（学校教育学科教授）、福島万紀（地域社会学科講師）の3名である。

自然共生研究部門では、教員の専門領域を超えた協働というセンターの特徴を活かし、「地域の自然と暮らし」をテーマに次のような活動に取り組んでいる。

- ・ 調査と研究
 - ①動物の生態研究
 - ②水文（すいもん）環境（水循環など）の研究
 - ③地域の農林業の持続に関する研究
 - ④自然と文化の保全活動

- ・ 収集と保管
 - ①地域の自然・文化資料の収集と保管

- ・ 教育と公開
 - ①自然観察会（ムササビ観察会、湧水観察など）
 - ②出前講座
 - ③公開講座
 - ④展示
 - ⑤出版（機関誌『フィールド・ノート』の発行など）

本年報では、上記3名の教員が取り組んだ事業の報告を担当別に報告する。

Ⅱ - 1 - 1. 動物の生態研究と教育・展示活動

1. 2021年度の活動概要

「フィールド・ミュージアム部門」の活動を受け継ぎ、地域の動物の生態研究を基盤に、①自然との共生のあり方を市民との交流事業を通して探ること②学生と市民との交流により地域の自然や文化を記録し保存し発信すること、を活動のおもな目的としている。2021年度も、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、活動内容や室内使用の制限など本学の感染症対策ガイドラインに従って感染症対策を講じながら活動を実施した。以下にその活動内容を報告する。

2. 活動の状況

（1）機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

学生が主体となり編集・発行する冊子『フィールド・ノート』を年3号発行した。従来は、年4号を発行してきたが、コロナ禍により感染対策を講じながら今年度は年3号を発行した。

この冊子編集は、地域交流研究センターの機関誌に位置づけられている活動で、2002年に創刊し2018年に第100号発行を迎えた。2021年度も学科・学年の枠をこえて14名の学生がこの冊子編集作業に参加した。

参加する学生は、自ら記事の企画をたて、実際に地域に出て観察や取材をし、記事を書き、レイアウト、入稿など一連の編集作業を行なう。毎週定期的開催する編集会議（平日の6時限に設定）でそれぞれの記事を校正しあい、課題を解決しながら冊子を完成させる。2021年度は各号800部を発行し、本学の教職員、学生、市民、全国の希望する読者に届けている。

2021年度の発行状況は次の通りである。

108号：2019年7月発行、2800部（オープンキャンパス用に2000部増刷）

特集タイトルは「あしあとをたどる」

109号：2019年12月発行、800部

特集タイトルは「駅間」

110号：2020年3月発行、800部

特集タイトルは「駅間」

また、編集部の学生は、7月17日（土）・18日（日）に開催されたオープンキャンパスにおいて、キャンパスツアーの担当として参加した。このオープンキャンパスで『フィールド・ノート』を見て編集に興味をもち、入学後、編集部に入った学生もいる。年齢的にも近いということもあり、キャンパスツアー終了後も、大学での生活や下宿生活の様子などを質問する高校生の姿が多く見られた。

地域の自然や人の暮らしをじかに観察し、取材をして記事にするという『フィールド・ノート』の一連の編集作業には、ただ冊子を発行するだけでなく、言語化が難しい体験と座学で学ぶ学問との往還を繰り返すことでの学びの深化が期待できる。こうしたフィールド・ワークが地域で可能となるのも長い時間をかけて教職員、学生が築いてきた市民との人間関係や信頼関係、人的なネットワークがあるからである。

読者からは次のような感想が寄せられた（一部を紹介）

- 自分ではきっと発見できないであろうと思う事を「フィールド・ノート」を見ることで知ることができ嬉しいです（時には散歩に出ようかなと思うことも）。都留の良さが満載ですね。これからも地元の人が忘れている（あるいは気づかない）ことを発見して発信していただけたらありがたいです。
- コロナ禍のなか、ありがとうございます。青春のおすそわけをありがとう。写真もとてもきれい。取材が丁寧にしてあるから読み応えがあります。
- 感染症の脅威のなかでの学生生活はさぞかし大変だと思います。「フィールド・ノート」毎号大変興味深く拝読させていただいています。学生の皆さんが都留で大切な時を無事にそして有意義に過ごしていただけるよう祈念しています。
- いつも貴重な情報を発信していただきありがとうございます。フィールド・ノートを見るたびに都留市の細かな事を再認識する機会となります。
- 毎号とても充実した内容で手元に届くことを楽しみにしている一人です。視点も写真も文章も一流だと感心しています。コロナに振り回されながらもこういう時こそ読みたくなる紙面です。都留市に都留文科大学があり、誇りに思います。

(2) ムササビ観察バスツアー

ムササビは身近な哺乳類でもあり、ほぼ定刻（日没後30分ほど）に活動を開始することなどから観察会の入門としても適している。赤いセロファンを付けることでムササビに眩しさを感じさせないようにしてできる限り自然な暮らしの様子を観察しようと工夫したのが本学の今泉吉晴名誉教授である。対象となる動物に干渉せず、お互いの暮らしを尊重しながら観察するというそのスタイルを受け継ぎ、ムササビの観察をとおして地域の自然の魅力や共生のあり方を探ろうというのがこの観察会の目的である。都留市の今宮神社をフィールドとし、氏子総代とも連絡をとり日程を決め、開催した。例年、現地までの交通の安全性を考慮しバスで移動するスタイルで実施している。

この観察会では、本学の環境ESDプログラムを受講する学生の実習を受け入れている。2021年度の実習生の受け入れは10名で、事前準備とムササビ観察会の開催など45時間の実習を実施した。

なお、2021年度はコロナ禍での対策として受け入れ人数を制限し、例年5～6回の開催を2回に限定して開催した。

開催日は次の通りである。

- ① 2021年12月1日（水）
- ② 2021年12月4日（土）

参加者からは次のような感想が寄せられた（抜粋）

- 観察中や終わった後、ムササビの知識をスタッフ・先生方が教えてくださってとてもよかった。また今後も参加したいと思っている。よろしくお願いします。
- 都留には、まだ半年しかいなくて詳しく知らないことが多いので、今回の体験を通じて思い出作りもできてすごくよかった。来年も楽しみにしている。
- スタッフたちがしっかり誘導してくれて大変ありがたく安心した。
- 気温が少し寒かったが（低かった）皆が優しく暖かく感じた。ありがとうございました。
- 今回は友達に誘われて参加したが行って良かったなと思った。地元にいる家族にも今日の話を話したいと思う。都留ならではのイベントに参加できてよかった。
- スタッフの方や先生がとても親切にして下さって十分に楽しむことができた。思いっきり自然を感じられて、貴重な体験になった。来年もぜひ参加したいと思う。
- 赤ライトで照らして下さったおかげでどこにムササビがいるのかがわかりやすくて助かった。小学生に話してあげたい。ありがとうございました。

(3) 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加

学校林や学校に隣接する森をフィールドとし、地域の自然を観察し親しむことを目的とする理科授業を行った。小学校における授業は次の通りである。

- ① 都留文科大学附属小学校：4年生を対象とした理科授業（2021年11月30日、2021年12月2日、2021年12月13日、2021年12月21日）
- ② 上野原市立島田小学校：3・4年生を対象とした理科授業（2021年11月2日）

(4) 富士急行駅舎を活用した展示活動

2021年度も、富士急行線都留文科大学前駅の駅舎を博物館の分館と位置づけ、展示活動を行った。地域交流研究センターおよび自然共生研究部門の活動を広報し、交流の輪を広げ

ることが目的である。駅舎では、キャンパス周辺の自然をテーマとし、『フィールド・ノート』で掲載した写真を中心に展示を行なった。

本学の華道サークルも生け花を定期的に展示しており、駅舎の利用者にも好評であった。

3. 2022年度の活動予定

今年度は、当初予定していた活動をほぼ予定通り実施することができた。「自然共生研究部門」では、今後もそれぞれの教員の持ち味を活かしながら事業を展開し、領域を超えた協働による事業にも取り組みたい。

2022年度、北垣が担当する取り組みとしては次のような事業を計画している。

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行
2. 環境ESDプログラムと連携した「ムササビ観察バスツアー」の開催
3. 地域の小学校の授業への参加
4. 富士急行線駅舎を活用した展示活動

上記の1～4の事業を通して、地域の自然や文化を保存するだけでなく、立場を異にするさまざまな人びとが集い、相互の交流・啓発を深めるなかで地域の文化や自然を創造的に継承していけるような仕組みを整えていきたい。

(文責：北垣憲仁)



Ami. W

Ⅱ - 1 - 2. 水文環境研究と自然に関わる市民公開講座（内山）

1. 令和3年度の活動概要

本事業は都留市の人々や動植物の暮らしに関わりの深い水文環境について、地層と地下水流動の関連性に関する研究や、湧水や水循環に関して都留市民との情報交流することを目的としている。研究対象エリアは東桂地区を主眼に置き、湧水量や地下水位変動などのデータの収集、およびその解析を行っている。市民公開講座は市民の都留市における自然への関心を高め、知的欲求を満たすことが目的である。令和2年度は新型コロナウイルス感染症防止の観点から、本部門の内山が担当する市民公開講座はすべて中止となったが、令和3年度は十分な感染症対策の元に3本の講座を実施した。以下にその詳細を述べる。

2. 活動の状況

(1) 都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究

都留市は富士山頂から直線距離で約25kmであるが、調査地域には古富士火山が山体崩壊して桂川の河谷に流れ込んで形成された古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の2層が分布している。都留市が利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、2015年度から継続して湧水量と水温の観測を実施している。湧水量の観測は、湧水が集まった小水路に自記水位計 S&DLmini (OYO 株式会社製) を設置して1回/時間の連続水位を観測し、流量観測結果を解析して得られたH-Qカーブ(水位と流量との関係式)を用いて水位を流量に換算して湧水量とした。2021年1月から12月までの観測結果は次のようである。

湧水量は491～918 m^3 /dayの間で変化した。2021年の湧水量は、平均的に600～700 m^3 /day程度で安定していたが、11月に入って湧水量が増加し、11月末には900 m^3 /dayに達した。その後11月30日に1時間で一気に650 m^3 /day程度に湧水量が減少した。これまでこのような湧水量の変化は認められていないため、水路にたまった落ち葉が引っかかってダムアップし、落ち葉が取り除かれて一気に水位が下がったなどの影響を反映しているものと考えられる。従って、この11月の湧水量変化は実際の様子を示していない可能性があり、解析時に注意を要する。2020年11月～2021年2月にかけて降水量が極端に少なかったが、湧水量には大きな影響は認められず渇水するようなことも無かった。水温については、これまでの観測結果と同様に、最高および最低水温のピークがおおよそ3ヶ月程度気温の変化よりずれており、12.8～14.2 $^{\circ}\text{C}$ の範囲で変化した。2020年の水温は12.0～13.8 $^{\circ}\text{C}$ であったため、水温が少し高い傾向にあったことが判明した。

(2) 都留市内の地下水位モニタリング

都留市では市民の水道水源でもある地下水を保全する目的で、2018年10月に地下水保全条例を制定した。地下水位の経年変化を把握し、地下水賦存量解析などの基礎資料を得るために、桂町(異なる深度2本)、十日市場、法能、禾生、鹿留、大幡、朝日馬場の市内7地点に8本の地下水位観測井を設け、2019年4月よりモニタリングをしており、本学ではその結果の監修をしている。また、それとは別に2本の地下水位観測孔が十日市場に2本あり、共同研究として地下水位観測を実施している。2021年の結果は都留市地域環境課によりホームページ(https://www.city.tsuru.yamanashi.jp/soshiki/chiikikankyou/kankyouseisaku_t/9990.html)

で公表されているので参照されたい。

(3) 市民公開講座

令和3年度は、3講座を開催した。いずれも、新型コロナウイルス対策本部の事前審査を受けて実施した。講座実施にあたっては、感染症防止対策として完全事前申込制を採用し、開催前に体調不良時の参加中止の呼びかけなど、参加にあたっての注意事項の連絡や、万一に備えて参加者の詳細な連絡先を把握しての開催とした。当日の対策としては、受付時の体温測定、手指消毒、マスクの着用、室内の十分な換気、参加者同士の距離の確保、他、を実施した結果、感染症に関する問題は発生しなかった。以下に各講座の詳細を述べる。

< 1. 星空講演会 >

- ・日時：2021年6月11日 18:15～19:15
- ・講師：古荘玲子（都留文科大学，国立天文台）
（敬称略）
- ・場所：都留文科大学 自然科学棟 S1 教室
- ・参加者数：42名
（一般市民10名，本学学生31名，
本学教員1名）



図1. 星空講演会の様子
（地域交流研究センターHPより）

この市民公開講座は、本来2020年度開催予定で準備をしていたが、感染症防止のため中止となり、2021年度に改めて企画されたものである。講演は講師の古荘先生が精力的に研究しておられる内容から「彗星から探る太陽系の過去」と題して、太陽系の天体や彗星の基本的なことから、彗星から何がわかるのかまで、2017年、2019年と立て続けに発見された太陽系小天体を含めた最新の研究にも触れながらご紹介いただいた。専門用語もあり少し難しい内容であったが、大学の講義の雰囲気も味わっていただけたのではないだろうか。

しかしながら、一般市民の方から難しいという声が多かったため、より分かり易く内容を楽しんでいただけるよう、講師の方への依頼の仕方が今後の課題である。また、「講演会」と題して広報したが、「観望会」と間違えて参加された方もいらっしゃったので、より内容が掴みやすい宣伝を心がけたい。

以下は参加者の感想である。

【星空講演会の感想】

★星空や彗星の写真を見ながら解説を聞く会だと勘違いしていました。専門的な内容で少し難しかったです。 ★懐かしい内容だった。 ★少し内容が難しかったです。 ★軌道の話は基礎知識がないと難しかったです。 ★彗星の名前の付け方や語源について知れて興味深かったです。アイソン彗星についてももっと知りたいと思いました。 ★星が好きで、講演に参加させていただきました。彗星は東方が先に見つけられる、とか名前を付けられるのが先着3名という部分が面白かったです。まだまだ研究課題がたくさんということでしたが、だからこそ奥が深いし、興味深いと思いました。今年12月の彗星、楽しみにしています。 ★あまり彗星の知識がない自分にも分かりやすく、約1時間の講義を夢中で聞いてしまった。10月の天文台での講義もぜひ聞きたいと思った。 ★星空が好きだからという、なんとなく

な動機でこの星空講演会に参加しましたが、彗星について定義から最新の話まで多くのことを知ることができ、大変勉強になりました。ありがとうございました。★彗星と流星の違いについては、ずっと知りたかったことだったので、今回知ることができてよかったです。ありがとうございました。★少し難しかったです。★とても興味深いお話が聞けて、楽しかったです。彗星のことはよく知らなかったのですが、きれいな尾がどうやってできているかや、どこからきているかなど、わくわくしながら聴いていました。また機会があれば参加したいです。ありがとうございました。★非常に興味深いお話を聴くことができ、貴重な体験をすることができました。幼少期に星座の神話の本を読んだことがきっかけで、星空を見るのが好きになりました。ですが、学校の理科の授業で習っただけでしたので、専門的な知識はほとんどなく、聴くお話全てがとても新鮮でした。また、お話を聴いただけで星空を研究する面白さを少し感じることができ、研究されている方々が羨ましくも思いました。ありがとうございました。★ただの“星空”ではなく、彗星という具体的目マイナー寄りなモノを取り上げての講演会はなかなかないのでとても面白かったです。知識として新たに学ぶものがありましたし、天文学自体にさらに興味惹かれました。★今回の講演会で、彗星の定義を理解していませんでしたが、彗星は、太陽の周りを回る移動天体だということを知ることができてよかったです。また、彗星の周期の差で、場所を特定できることを知れて、興味深かったです。★星の名前のつき方、彗星の軌道がおもしろいと思いました。★とても興味深く聴かせていただきました。彗星の基本的なことから、先生の研究のことまで分かりやすくきかせていただくことができたかと思います。★専門的な話でわからなかったことが、多かった。もう少し、わかりやすい話をしてほしいと思った。★難しすぎて全然わからなかった。★観望会と間違えました。彗星の話は難しかったです。★彗星の発見と名前、100万個の彗星に全て名前がついているの。これから夜空を見るのが楽しくなりそう。2061年8月7日に彗星群が見られるとは、78才の私にはちょっと無理かなあ。★ありがとうございました。時間が少ないです。★彗星とはこんなに奥が深いとは。講座の内容は難しくてわからないけど、10万分の1,100万分の1くらいは理解できたかな…。毎日、ボウとして生活しているお婆さんなので、とても刺激になりました。また、参加したいですね。先生の活動的な様子、羨ましく思います。宇宙のことは好きなのですが…。★むずかしくて、よくわからなかったが宇宙のことは、わからないながら、非常に興味があります。★大変興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。★ありがとうございました。久しぶりの講義でした。それも大昔の体験です。ハレー彗星は以前、懸命に観察しました。流れ星はしばしば見ます。昔、私は理科の教師でしたが、このように夢が広がる話はできませんでした。★専門的なことは、なかなか理解できませんが、都会では夜空に興味を持てませんでした。都留でもキレイとのことでしたので、感心を持って空を見るきっかけになりました。ありがとうございました。★彗星に尾があることは知っていましたが、尾が2つあることは初めて知りました。彗星は、生まれた場所が違うとのことのお話が面白かったです。オールト雲でできた彗星とエッジワース・カイパーベルトでできた彗星が、生まれた場所と含まれている位置が逆になっているところは、驚きでした。資料が専門用語で書かれていたが、説明では、わかりやすい言葉で説明していただいたので、とてもわかりやすかったです。彗星が身近に感じられました。今年のお正月あたりに、見られたらなと思っています。ありがとうございました。

＜2. 湧水さんぽ ー都留市十日市場・夏狩湧水群と忍野村忍野八海の見学ー＞

- ・日時：2021年11月6日 9:40～17:00
- ・開催団体：
地域交流研究センター自然共生研究部門 主催
共催 日本地下水学会市民コミュニケーション委員会
- ・講師：
内山美恵子
(都留文科大学教養学部学校教育学科教授)、
内山 高 (山梨県富士山科学研究所相談員・
都留文科大学非常勤講師)、
古川正修 (日本地下水学会)、
斎藤健志 (産業技術総合研究所) (敬称略)
- ・場所：都留市夏狩～十日市場、南都留郡忍野村
- ・参加者数：
33名 (一般市民27名、本学学生6名)、スタッフ21名 (センター2名、学生スタッフ3名、
委員会16名)



図2. 太郎次郎の滝での集合写真
(日本地下水学会 HP より)

この講座は都留文科大学地域交流研究センターと日本地下水学会市民コミュニケーション委員会との協同開催である。本来は10月23日に開催予定であったが、7月12日～9月30日の期間に「新型コロナウイルス感染拡大防止のための東京都における緊急事態措置等」が実施されていたため、予備日の11月6日の開催となった。

【協同開催の経緯】

「湧水さんぽ」は従来、十日市場・夏狩湧水群への都留市民の関心を高める目的で、地域交流研究センター自然共生研究部門 (以後、センターとする) で実施してきた。一方、日本地下水学会市民コミュニケーション委員会 (以後、委員会とする) は広く一般市民の湧水への関心を高める目的で、関東地方の都市域を対象に「湧水めぐり」を実施している。委員会では今後のさらなる市民への啓蒙活動を模索しており、地方開催を検討していた。その端緒として都留文科大学地域交流研究センターと日本地下水学会市民コミュニケーション委員会との協同開催で、十日市場・夏狩地区および忍野八海を対象とした事業プランが浮上した。センター会議でも検討した結果、両者の開催目的がほぼ同じであり、センター事業とも整合的であることから、初めての学会との共催事業が実施される運びとなった。対象エリアが東桂地区であることから、センターが主催することとし、名称はセンターで使用している「湧水さんぽ」を使用する事とした。

【事業の運営】

事業の広報は、センターでは都留市内を対象として大学HP・都留市広報・チラシを用いて、委員会では日本地下水学会HPへの掲載で実施した。業務分担については、委員会が資料集の原稿執筆と印刷、当日の受付・班の引率・都留市での見学地点の説明 (忍野八海についての説明は富士山研の内山 高先生が担当) を、センターがその他の事業実施に必要な対応 (例えば、参加者の申し込み対応・バスの手配と支払い・運用車での付き添い・大学食堂の使用

許可申請・アンケート作成と集計、など)を、内山が総括的役割と資料作成・現地説明を分担した。実施準備として、センターで経路確認と挨拶回りを1回と打ち合わせを3回、委員会で現地下見と打ち合わせ会議を2回行った。

【事業内容】

事業は参加者を4班に分けて実施した。集合場所を富士急行線「東桂」駅とし、駅前で受付後に委員会担当者が引率して夏狩地区の菊地わさび園に移動した。全員集合後に菊地わさび園にてセンター長の北垣先生と委員長の古川氏から挨拶をいただき、「湧水さんぽ」を開始した。菊地わさび園では学校教育学科自然環境科学系地学ゼミの3年生学生により、本地域における湧水のメカニズムについて実験と説明がなされ、わさび園主の菊地さんからわさびの説明を受けた。露頭の見学後、班ごとに太郎次郎の滝へ歩いて移動し、説明を聞きながらの観察の後、集合写真を撮影した(図2)。その後は歩いて長慶寺から永寿院、田原の滝を観察して都留文科大学に戻った。距離にして5km程度であるが高低差もあり、年配の方やベビーカーで赤ちゃんを連れている方もいらしたので心配されたが、スタッフ車を使用することも無く全員湧水を楽しんで完歩できた。昼食は持参の弁当とし、大学の食堂を使用した。その後2台のバスに分乗して忍野八海へ移動し、希望者のみみ出口池で途中下車し説明を聞いての見学と忍野八海への歩いての移動、その他の参加者はバスで忍野八海へ向かった。忍野八海は一般観光客で混み合っていたので、集合時間を決めて、資料や説明看板を見ながらの各自観察および自由行動とした。最後は、忍野八海バス駐車場に集合し、閉会の挨拶をして解散とした。解散後、バスを富士急行線「富士山」駅行きと都留文科大学行きに分け、希望するバスに乗車して終了とした。

初めての学会との協同開催であったが、センタースタッフならびに委員会スタッフの献身的な運営により、事故無く終了できたことの意義は大きい。ただ、地方開催では交通費の観点から下見の回数が制限されるため、ルート設定に関して工夫が求められる。しかし、参加者の感想を見ると、居住区でありながら知らない事が多く様々な事が学べた、などの意見が多く、事業実施の目的はある程度達成できたものとする。当日の報告は、日本地下水学会HPでも報告されているので、参照されたい(<http://www.jagh.jp/jp/g/activities/torikichi/spring/>)。

以下は、参加者の感想である。

【湧水さんぽの感想】

★実際のフィールドを見ながら専門の方が説明してくださり勉強になりました。さんぽ気分でお話聞けて、楽しかったです。★興味深い事ばかりです★初めに湧水のシステムを実験で教えてくださったおかげで、それからの湧水スポットを回るのにとっても助けとなりました。また、スタッフの方がとても丁寧に接してくださったおかげで、安心して楽しむことができました。山梨の魅力がたくさん伝わってきました。素敵なイベントを開催していただき、本当にありがとうございました。お疲れさまでした。★様々なスポットを自分の足を使って巡ることで自然の雄大さをより感じる事が出来ました。またこのイベントを通して多くの人と関わる事が出来、とても楽しかったです。★わさび園と忍野八海は初めて行きましたが、解説をして頂いたことで、自然的な価値の要をわかりやすく学習する事が出来ました。忍野八海すべての池はまわれませんでした。出口池を案内して頂けて良かったです。★初めての参加だったが、大変有意義であり楽しかった。今回は地元の都留だったが、9割方行ったことがないところで勉強になった。この機会に次回は他の地域のさんぽに参加した

いと思いました。都留に住んでいても、文大の中に入ったこともなく昼食時に学生食堂で入れたこともうれしかった。なお一層、文大が身近に感じました。★先生方の説明もとてもていねいで解りやすかった。地元なのに知らない場所とかお寺とかたくさんあって楽しかった。初めての参加でしたが、ぜひ次回も参加したい。★豊富な説明をいただけてうれしかった。参考になる。湧水のしくみが学べた。無料なのはうれしい。2つのエリアを巡ってよかった。(でも1つだけでも十分だったと思います)運営のずさんさが気になりました。(忍野帰りのバス・点呼なし)参加者の歩くペースを無視した出口池→忍野八海の歩行、班についたボランティアが地元の参加者に道を尋ねるなど・・・大学が行うか公開講座の安全管理としては、不安だらけでした。★今回行った所は個人的に歩いていましたが、学問的にきちんと説明が受けられてとてもよかったと思いました。湧水めぐりで15回も開催され、今回が16回目ときいてびっくりしました。特に第1回の西国分寺から武蔵小金井は私の生まれ育ったところでお鷹の道、殿ヶ谷戸など歩いたことがあるので、また同じ所をやってもらえればうれしいです。★地元からの参加でした。日頃から散歩コースにしていた今日のコースを湧水や溶岩、水質など説明してもらえてとても勉強になりました。良い時期の開催のおかげで気持ちの良い時間を過ごすことができました。ありがとうございました。★身近に存在する湧水を散歩しながら観察することができ、貴重な経験ができました。この様な学びの機会を孫世代にも広げられたらと思いました。★資料、多勢のスタッフ、ていねいな説明で楽しく、充実した湧水さんぽができて、よかったです。★お世話になりました。散策コースがあるとは知っていましたが、ご案内いただき説明もわかりやすく、自分だけでは得られない経験になりました。これからも地域に開いたイベントがあると嬉しいです。ありがとうございました。★湧水や地形を見学するイベントに参加するのは初めてであり、説明を聞きながら見学することができるというのは楽しく、勉強になった。個人的に見に行っていたことがある都内の湧水スポットとは水量が全く異なっており、地下水が豊富な地形ではこんなにも水量が多いのかと驚いた。永寿院での水の有機物が少ない方がおいしく感じるという話が気になったので今度飲み比べをしてみたいと思った。★たくさんのスタッフの参加があり、ありがとうございました。各場所ごとの説明の方がおられ、待っておられたことに驚きました。見学した場所は何回か来たことがありますが、ただ「きれいだね」とか「めずらしいね」と思うだけでしたが、やはりていねいな説明があることが私にとってとても興味を持ちますます関心を持つようになりました。ある程度の知識はありましたが、もっと掘り下げて、調べてみようと思うようになりました。ありがとうございました。★地質や地理は全く不勉強だったので、実験や幾つかの実例を見られて湧水のメカニズムをよく理解できた。また、溶岩のへりの場所まで歩いてきて、富士山の噴火の威力の一端も感じられた。氷河期時代に雪をまきこんで流れた泥流の中の石が河原石などと異なり角ばったままうめこまれているというのが当時の勢いを感じられて1番おもしろく感じた。今後は人為的な痕跡だけでなく、自然の観察もしながら散策していきたい。★地質については関心があります。ウォーキングもかねて、参加しました。ただ見ている地層と、説明を受けて、よくわかりました。まだまだ奥は深そう。★豊富な湧水を生活に活かしている様子がよくわかりました。水の作り出す景観に接して、改めて水のおかげで生活していけるだとわかりました。★秋晴れの中紅葉に囲まれ楽しい「さんぽ」ができました。古きを尋ね、湧水にふれ都留は水に恵まれていることをつくづく感じました。★地元に住んでいるのに、行ったことが無く、知らない事があり興味深くなり、参加しました。地層に付いての説明を聞き勉強になりました。また、一人で歩いてみようかと思いました。★久しぶりに、友だちにさそわれて、参加しました。都

留市に住んでいて、こんな自然にかこまれて、幸せな気分です。午前中のわさび園、太郎次郎滝も初めて来たので新鮮です。地下水にまつわる湧水ポイントをめぐり、いろんな発見がありました。また参加したいと思います。★地学の授業で、永寿院と田原の滝を訪れたことはありましたが、他の見学場所は、自分ではいけないようなところでしたので、とても貴重でした。道中や、それぞれの見学先でいただける解説も、大変興味深く非常に得難い経験ができました。とても楽しかったです。また、配布されました資料も、大変読みやすく、詳細に書かれているので、今回学ばせていただいたことが、このように残る形にして頂けて、とても嬉しかったです。家族にも、このパンフレットを見せながら話をしたいと思います。本当にお世話になりました。貴重な経験をありがとうございました。★初めて大学のイベントに参加しました。4月から都留生活が始まりましたが、河口湖方面に行く機会がありませんでした。今回訪れた場所はどこも行ったことがなかったので、とても楽しみながら歩けました。桂溶岩や古富士泥流の説明で、景色から都留の歴史や環境についても学ぶことができ、良かったです。色々な話が聞ける「さんぽ」は新しい発見がたくさんありました。大月方面の「さんぽ」もあったら面白いと思います。今回得た情報を家族や友人に都留案内で生かしたいです。★天気にも恵まれ楽しい時間を過ごせました。日頃机に向かって座っているばかりで運動不足を解消!! ★以前に同じコースを歩いたのですが、説明付きの「湧水さんぽ」に興味があったのでぜひ参加したかった。「湧水のしくみ」などわかりやすかったです。水の豊富な都留市近辺はうらやましいです。最近運動不足なので少し不安がありましたが、スタッフの方々の心使いに安心して歩きました。

< 3. 星空観察会 >

- ・日時：2021年11月11日 18:15～19:15
- ・講師：古荘玲子（都留文科大学、国立天文台）
（敬称略）
- ・場所：都留文科大学 自然科学棟天文台・S6教室
- ・参加者数：10名（一般市民9名、学生1名）

最上流に富士山という日本最高峰の山があり、桂川の谷中という地形の影響を受けて普段は雲量の多い都留市田原地区であるが、今年は雲一つ無い絶好の星空観察日和となった。この公開講座は悪天候やコロナ禍により開催を見送る年が続いたが、準備を始めて3年越しに開催が実現した。

まず教室で観測する天体や使用する天体望遠鏡について、講師の古荘先生から説明を受け、2班に分かれて天文台と屋上に設置した望遠鏡で天体の観察を行った。観測した天体は、月（月齢11）・木星・土星である。月の表面が隕石の衝突により穿たれたクレーターに覆われてまるでゴルフボールのようになっている様子や、木星の周囲に並ぶガリレオ衛星、土星の輪を自分の目で観察し、歓声が上がった。当日は牡牛座北流星群の極大日であり、光跡の長い明るい流星を目にした参加者もいた。同じ天体でも望遠鏡の口径によって異なる点も確認していただいた。参加者の要望として、今後も星空観察会の開催を望む声が多く聞かれた。

センターでは星空観察は日没が早く、空気が澄む晩秋から冬に企画しているが、寒さに対



図3. 天文台での観察の様子
(地域交流研究センターHPより)

する注意喚起が不十分だった点が反省される。また、暗い場所での移動になるため、足元に注意するように声かけをもっとしっかり行うなど、安全管理にもより一層心がけたい。

以下は、参加者の感想である。

【星空観察会の感想】

★個人でも、宇宙旅行ができる時代になったが、それは無理。文大にて月、木星、土星が見れたことは大変うれしく良い一日を過ごすことが出来た。孫にも、星に興味を持ってもらいたい。★天気にも恵まれたたくさんの星が見えてよかった。いつも見ていた星が木星と土星だとわかり、一寸感激です。又、このような企画をお願いします。★準備不足がちょっと多かった。足元階段（外）下の2段目みえづ踏み外して、危ない思いをした。ありがとうございました。初めて木星・土星を見れて嬉しいです。★初めて木星、土星を見ました。望遠鏡で見るとこんな状態なんだと知りました。月の表面のクレーターをしっかりと見ることが出来、貴重な体験です。ありがとうございました。このような機会を又作っていただきたいと思います。★初めて天体望遠鏡というのを見ました。リアルな星の姿を自分の目で確認できたので本当に貴重な経験となりました。ありがとうございました。今後もこのような観察会を開いていただきたいと思います。よろしくお願い致します。★初めて大型望遠鏡で星を見ました。説明をききながらでしたので星の様子が理解できました。また、機会があれば参加したいと思います。ありがとうございました。★あまり、夜空を見上げる事がなく、月くらいで終わってしまっていたので、木星や土星もしっかり見ることができ、とても良かったです。

3. 令和3年度の活動予定

(1) 都留市を流れる水文環境に関する研究の実施

湧水の連続観測地点を十日市場エリアから夏狩エリアにも広げ、より詳細な湧水特性を把握する。

(2) 市民公開講座

令和4年度は十日市場・夏狩湧水群の野外見学を従来の形に戻し、地域交流研究センターで実施する。また、専門家を講師に迎えての星空講演会ならびに自然科学棟天文台を利用したの星空観察は大変好評であったため、回数を2回に増やして実施する予定である。

(3) 都留市の水環境理解促進のための展示準備

本学の地学教育の歴史がわかる展示や、十日市場・夏狩湧水群など都留市の特徴的な水環境を理解するための地域交流研究センター交流スペースでの展示について、取り組む予定である。

(文責：内山美恵子)

Ⅱ - 1 - 3. 農林地一筆マップ調査

1. 令和3年度の活動概要

都留市における農家林家の高齢化の状況を明らかにするため、前年度に都留市宝地区の農地の作付け状況および耕作者の状況について調査を行った。その結果、耕作されている農地のうち約3分の2が70代以上の高齢者によって耕作されている実態を明らかにした。

令和3（2021）年度は、農林地一筆マップ調査と本学の教育活動を連動させる試みとして、地域社会学科の学生実習を当該地域で行い、1年後の変化について確認をした。

2. 活動の状況

令和3（2021）年6月27日に地域社会学科の学生11名が都留市宝地区を訪れ、同地域の田の作付け状況や耕作放棄地についてとりまとめた2020年度のマップをもとに、2021年度の状況を視察した。1年間後の作付け状況に大きな変化はみられなかったが、作付がほとんど行われていない農地でも耕起を継続することで農地を保全しようとする事例が観察され、高齢により耕作ができなくなった場合でも、農地を守りたいという農家の強い意向をうかがうことができた。

実習後のヒアリングにおいて、70代の農家から、高齢化が進み水田耕作の作業を農協等に委託する割合を増やすと、水田耕作の経営がより悪化する実態についてうかがい、今後もそのような状況が進行することが再認識された。また数年前から農業を新たにはじめた50代の農家から、同世代の大半が都市部へ他出している現状についてうかがい、農業の担い手を地域的に確保していく必要性が再認識された。

以上のような状況では、地域の農業の現状認識とともに、次の対策を講じていくことが重要である。じっさいに実習後、70代の農家から2021年10月の稲刈り作業の補助の要請があり、1名の学生が3日間の補助を行った。とくに稲刈りにおいては、収穫後の重量物を持ち上げる作業が高齢にともない困難化しており、部分的にでも補助があることが高齢農家の耕作の継続において重要である様子がうかがえた。

以上の状況をふまえ、令和4（2022）年度は、農作業補助を必要とする地域の農家と本学学生を適切につなぐ仕組みについて、ボランティアひろばの運用状況等を手掛かりに、検討をすすめていきたい。

（文責：福島万紀）



写真1. 耕起を継続し農地を維持している様子
（2021年6月27日）



写真2. 耕作放棄地を山林の境界を見学する学生たち
（2021年6月27日）

Ⅱ－２．共生教育研究部門

Ⅱ－２－１．地域美術教育

【活動の振り返りと今後の活動に向けて】

2021年度は、前年度同様に新型コロナウイルス感染症に対する十分な予防対策を行ったうえで活動を行いました。活動を温かく見守っていただいた地域の方々、保育所や小学校の多くの先生方、明るく活動を盛り上げ支えてくれた本学学生の皆さん、本学の教員の方々にこの場をお借りし感謝申し上げます。活動のサポートや実践指導は、本学学校教育学科図工・美術教室の学生及び教員が中心となって行いました。



都留文科大学では、現在、多くの教員・研究者によって人間社会の豊かさの探求のため、多岐にわたる専門的な教育・研究がおこなわれています。そして、地域交流研究センターの共生教育部門地域美術では、本学学校教育学科における図画工作教科の実践研究を活用しながら、新しい創造的な表現活動を通じた地域交流の方向性を探っています。

筆者が都留地域の歴史の奥深さを知ったのは、地域交流研究センターのワールド・ミュージアム部門（現在の共生教育研究部門）が管理する貴重な写真資料を見せていただいたことがきっかけです。この資料にある都留市は、大学が設置される以前からの地域の人たちによって築かれた生活文化と豊かな自然環境が記録されていました。

今後は、地域美術部門という特性を活かし、現在まで行っている実践活動を行うとともに学内にある研究成果や貴重な資料をより多くの地域の方々に知ってもらうため、展示交流活動の「場」を美術的視点で積極的に作っていきたいと考えています。また、私たちを取り巻く社会は、大きな変化の中にあります。そのことから大学の在り方も大きく変化して行くことが必要です。この素晴らしい都留の環境と多くの人の集まる大学として、新しい学びの活動を作り上げて行きたいと考えています。

（文責：青木宏希）

【活動の状況】

○教育フィールド研究Ⅱ「アート活動」の指導・活動運営

5月22日（土） 「紙粘土工作 元気のおまもりづくり」

6月19日（土） 「お花紙を使った表現—重ねて貼って—」

12月11日（土） 「段ボール箱を使った工作—自分の世界—」

○都留市保小連携事業「宝保育所造形活動」

7月21日（水） 「粘土やきもの体験」

9月6日（月） 「液体粘土—かお制作—」延期

10月27日（水） 「液体粘土—かお制作—」

1月21日（金） 「木材を使った立体活動」中止

○都留市夏休みこども公開講座

7月24日(土) 「木切れを使った工作」

7月25日(日) 「粘土を使ったやきもの製作」

○谷村第二小学校土曜体験学習の指導・活動運営

10月30日(土) 「陶芸教室 マグカップ制作」

○都留文科大学附属小学校 陶芸教室

12月6日(月) 「講義 焼き物の歴史や文化を学ぶ」と「カップ制作」

12月13日(月) 「玄関に飾るものを作る」



宝保育所造形活動 やきもの 制作風景



教育フィールド研究アート活動
段ボールを使った活動

Ⅱ - 2 - 2. 地域インクルーシブ教育

1. 地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、地域の特別なニーズのある人たち（およびご家族）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。

この分野の主要な活動は以下である。

- ① 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動“クロボ”
- ② 特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”

この2つに加え、2021年度は、都留市内で活動するNPO法人「にこ研 親子のえがお研究クラブ」との共催で、「お外 de あそぼう会 in 都留文科大学」を開催した。

2. 活動の内容

① 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動“クロボ”

正式名称は、「クロスボーダー・プロジェクト」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”としている。

2021年度は、学期中、月1回土曜日に10:00～15:00で実施し、各回、小学生～社会人までで計35名程度（小学生11名、中学生4名、高校生10名、社会人10名）が参加してくれた。その他、午前中のホッケー活動のみ、社会福祉法人あすなる会 みとおしの利用者さん数名がゲスト参加してくれた。

毎回、平均50名ほどの学生や市民がボランティアとして参加してくれた。学校教育学科「特別支援フィールドワークⅠA・ⅠB」「教育フィールド研究ⅡB・C・D」を受講する学生も、学生ボランティアとして参加した。

コロナ禍にあって、マスク着用や消毒の徹底、密回避などの感染対策の措置をとりながらも、年間6回の計画どおり、全ての回について実施することができた。

<前期>

- ① 5月22日（土） 午前：ダンス、フロアホッケー
午後：アート
- ② 6月19日（土） 午前：ダンス、フロアホッケー、新聞紙ボール・フリスビー（投げる運動）
午後：アート
- ③ 7月31日（土） 午前：ダンス、フロアホッケー、新聞紙ボール・フリスビー（投げる運動）
午後：音楽

<後期>

- ① 10月16日（土） 午前：ダンス、フロアホッケー
午後：「つくる」「てつがく」「じぶんをしる」音楽
- ② 11月20日（土） 午前：ダンス、フロアホッケー
午後：「つくる」「てつがく」「じぶんをしる」環境学習
- ③ 12月11日（土） 午前：ダンス、フロアホッケー、シットイングバレエ
午後：音楽、アート

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。各回の活動の様子については、写真とともに、大学 HP と Twitter に掲載した。

②特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”

□概要

本事業は 2015 年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017 年度からは特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」（集中講義）として位置付けられ、2021 年度まで原まゆみが担当した。2021 年度は新型コロナウイルス感染症への対応が求められる中、感染対策に留意しつつ、計画通り年間 6 回実施することができた。特別なニーズのある中高生や若者の将来イメージ形成に寄与する「思春期キャリア支援プログラム」として実施し、学生が当事者の将来展望の育成を目指すプログラムを企画運営するフィールド研究の場ともなっている。

□参加者

中高生・若者の当事者 13 名、大学生 18 名、保護者 12 名

□運営委員（地域の専門家）11 名

NPO 法人 おもちゃ図書館はばたき理事長、障がい者就業・生活支援センターありす就業支援ワーカー、フリースクールオンリーワン理事長、山梨県立ひばりが丘高等学校教諭、山梨県立やまびこ支援学校教諭、元大月市立小学校通級指導担当教諭、フリースクールにじらボ代表、県立高等支援学校桃花台学園教諭、保護者（放課後等デイサービス事業者、親の会「ぶどうの会」代表者）

□職場提供者

職場体験にご協力下さる事業所等は 10 カ所以上あるが、2021 年度は次の 2 カ所で体験させていただいた。コロナ禍において暖かい理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。

老人介護施設真心の里様、ほしのさと工房様、就労支援センターいちごいちえ様、宝オートサービス様、都留文科大学図書館様

□ワーク実施内容

目標 ○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。

○どんな仕事に向いているか、職場体験をしてみよう。

○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容（場所：3 号館）

No	日 程 等	内 容
1	5月22日(土) 13:10～15:00 保護者説明会 10:30～12:00	○仲間を知ろう (昨年の振り返り/ストロータワーゲーム/ポンコツペイントゲーム)
2	6月19日(土) 13:10～15:00	○仲間ともっと関わろう! (ビンゴ大会/職業当てクイズ)
3	7月31日(土) 13:10～15:00 保護者の語り場① 10:30～12:00	○いろんな職業について調べて職場体験につなげよう (職業かるた/職業調べ/体験先希望調査)
4	10月16日(土) 13:10～15:00 保護者の語り場② 10:30～12:00	○職場体験に向けて準備をしよう! (名刺づくり/名刺渡し練習/職場体験の説明)
5	11月13日(土) 10:00～15:00	○職場体験:自分の将来を想像しよう! (いちごいちえ/ほしのさと/真心の里/宝オート/図書館)
6	11月14日(日) 10:00～15:00 保護者の語り場③ 10:30～12:00	○職場体験と1年間の振り返りをしよう! (職場体験の振り返り/体験報告会/お礼状づくり/1年間の振り返り/アルバムづくり/お疲れ様会)

□成果と課題

発達障害等のある若者は自己肯定感や将来イメージがもてないまま学校を卒業し、社会への移行に躓きやすい問題を抱えている。彼らには思春期から参加できる援助実践が必要である。このため思春期キャリア支援プログラムとして、キャリアデザインワークの実践を積み重ねてきた。このプログラムは先行実践の就労支援ワークのスタートから数えると今年で15年にもなる。本学のキャリアデザインワークも、学生、保護者、運営委員、地域の事業所の皆さんと共に5年の節目を越えることが出来た。ここで積み重ねた実践を検証し、支援実践に求められる構成要素を導き実践モデルを提起し、実践の継続発展を目指しているとこである。

実践検証では、学生達の丁寧に記録した自己の学びやまとめ課題レポート、当事者の参加記録、プログラムや反省会の記録などから、当事者の自分づくりの課題や同世代の若者がともに実践に参加する意義などが明らかになった。2021年度の学生たちも企画運営と併せて丁寧な考察を積み重ね、「2021年度キャリアデザインワーク活動報告書」を作成し関係者に配布することができた。

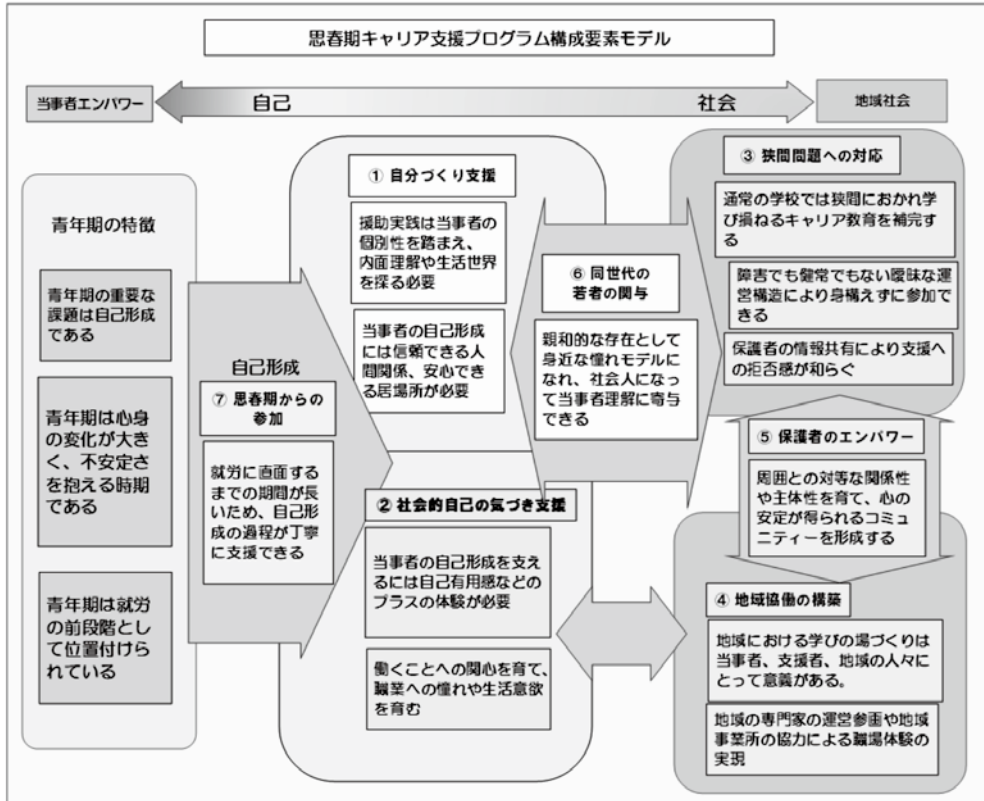
運営会議や保護者の語り場の内容からは、社会制度の課題や地域とのつながり、保護者のエンパワーの重要性などが明らかになった。運営委員の方々は学校や教育関係、福祉事業所、就労支援関係などの専門家であり、それぞれの問題意識から有意義な助言を頂いた。また、保護者には「保護者の語り場」での意見交換をとおして養育過程、進路の悩みなど深い経験を共有させていただいた。さらに、職場体験先の事業所でも暖かいご理解や激励を頂き、地域との交流により学生たちが貴重な生きた学びの機会を得られたことは言うまでもない。キャリアデザインワークはこうした多様なフィールドの方々といっしょに、地域協働実践を創り出してきた。

以上を踏まえた思春期キャリア支援プログラムの実践モデル図は以下のとおりである。このモデル図には実践検証から導かれた7つの構成要素が含まれている。つまり、狭間問題により自己肯定感が育ちにくい当事者が、思春期の時期から障害の領域に限定しないプログラムに参加し、同世代の若者の関与によって自己肯定感を育むことや、地域の専門家や事業者

の協力を得て働く体験に取り組むことで、将来イメージを育てることに寄与し、さらに不安を抱える保護者のコミュニティーを構築する、という構成要素を含む実践モデルである。

彼らの学校から社会への移行期支援にはこのモデル図に示されるようなプログラムが求められる。様々な実施主体によりこの実践枠組みのモデル図が活用されることで、思春期キャリア支援プログラムの展開に寄与できるものとする。

思春期キャリア支援プログラム実践枠組みのモデル図



③ 「お外 de あそぼう会 in 都留文科大学」

「お外 de あそぼう会」は、NPO 法人にこ研で、毎月1回、都留市内で子育てに取り組んでいる親子同士が出会いつながることを目的として平日に行っている屋外イベントである。主に、入園前の子どもと保護者が参加している。

2021年度、都留文科大学の構内で、地域交流研究センターとの共催で実施し、地域の親子と学生との交流や、地域の親子に大学のことを知ってもらうことをねらいとしたイベントを開催した。参加者は各回、未就園児の親子4組およびにこ研スタッフ3名で、学生3名ほどが、学校教育学科「教育フィールド研究ⅡA」「専門演習（特別ニーズ教育学）」の一環としてボランティアとして参加した。実施回と内容については、次のとおりである。

- ① 5月31日（月） 9:30～10:20 内容：水遊び、シャボン玉 など
- ② 7月29日（木） 9:30～11:20 内容：中庭探検、メダカ観察 など

3. 2022年度の活動の展望

先にも書いたが、コロナ禍でもなんとか計画していた全部の回のクロボ／キャリアデザインワークを実施できたことは喜ばしく、With コロナであっても実施可能な活動のイメージが確立されつつある。2022年度も、コロナ対策をとりながらの活動になるが、引き続き、参加者が「楽しさ」「充実感」を味わえることを念頭に置きながら、順次開催していきたいと考えている。

2021年度末を持って、5年間、クロボとキャリアデザインワークの運営に携わってこられた、学校教育学科特任教授である齋藤淑子先生、原まゆみ先生が任期満了で退職されることとなった。ただお二人については、2022年度は、地域交流研究センターの協力研究員を担っていただくことになり、1年間、クロボとキャリアデザインワークに関する研究活動に「調査者」という立場で関与していただくことになった。ここ数年の懸案事項で、クロボとキャリアデザインワークの事業当日、「運営者」である専任・特任教員3名はみな両活動の安全な運営や学生指導などの対応で手一杯であり、研究の遂行に不可欠なデータ収集（及び分析作業）に十分にに取り組むことが困難な状況が続いていたことから、お二人の助力によって、そうした研究面が進展することを願う次第である。

また、2022年度は、齋藤先生、原先生に代わり、新規採用の学校教育学科特任教授である山本剛先生、佐藤比呂二先生に、「運営者」として、クロボとキャリアデザインワークに携わっていただくことになった。これを契機に、心機一転、新しい発想を取り入れつつ、安全安心に気をつけながら、充実した事業を展開していきたい。

(文責：堤英俊、山本剛、佐藤比呂二、齋藤淑子、原まゆみ)



Aimi. W

II - 2 - 3. 社会教育

1. 社会教育分野について

共生教育研究部門の社会教育分野は、地域における多様なエージェントを巻き込みながら、それらがつくりだす共同学習の支援を旨とし、とりわけ、都留市内に新たな成人教育の場を創出し、そこに高等教育機関としての本学がもつ学問知をつなぎ合わせることを目的とする。

2. 2021 年度の活動：「つるぶん café」の開催

① 活動の趣旨

上記のことを目的として、2020 年度の総括、および 2021 年度の方針として、以下のように昨年度年報で述べた（抜粋）。

参加者間の相互作用と学びの継続性を重視し、さらに、市内のカフェを会場に平場で開催することを旨とする「つるぶん café」は、地域交流研究センターの他事業よりも一層、実施の困難を経験した。膝を付き合わせ、口角泡を飛ばすような学び合い、という社会教育の強みについて、コロナウィルス感染症拡大の前に、どのようにもそれを生かし得る方途が見出せなかった。強みが弱みになり得ることを痛感した。

2021 年度は、提供されつつあるワクチンに期待しながら、社会教育の強み／弱みを鍛え直したい。

継続するコロナウィルス感染拡大を受け、飲食を伴う「つるぶん café」は 2021 年度も開催にあたり多くの課題があった。当初、都留市内のカフェを会場にして、定員を引き下げて（10 名から 5 名）対面での開催を予定したが、本学の対策レベル引き上げに伴い、急遽オンラインでの開催に変更した。

② 第 1 回「つるぶん café」の概要

- ・日 時：2022 年 1 月 29 日（土）14 時 30 分から 16 時
- ・場 所：オンライン（zoom）
- ・参加費：無料
- ・テーマ：性の多様性ってなに？～子どもとわたしと教育と～
- ・テュータ：堀川修平さん（本学学校教育学科・非常勤講師）
- ・定 員：5 名

なお、社会教育実習の一環として企画、当日までの準備、運営を行い、社会教育実習生である 3 名、嶋崎亜澄さん（英文学科 3 年）、鈴木紫陽さん（地域社会学科 4 年）、瀧澤杏樹さん（英文学科 4 年）の運営補助を受けた。

③ 参加者の声（抜粋）

当日は 4 名の参加があった。講師による進行のもと、身近な事柄を共有しながら講座が展開されるとともに、参加者も少人数での開催であったため、「つるぶんカフェ」の趣旨に応じて講師と参加者がフラットな関係で互いに学び合う雰囲気のなかで開催された。当日の感想は以下の通りである。

- ・ 今日の話聞いて、今まで忘れていたけど思い出したことがいっぱいあって面白かったです。

- ・運営の皆様、この度は貴重な機会を設けてくださりありがとうございました。オンラインの場合、相手との距離感がつかめず難しいところもありますが非常に和やかな雰囲気だったように（少なくとも私は）感じました。開催後の反省まで含めて、多くの方とつながりながら練り上げられたのではないかと思います。出発点となった思いや、企画立案にあたっての試行錯誤など、企画・開催までのプロセスが気になってしまう、思わずシェアしてほしいと思うくらい、私にとっては印象深い企画でした。
- ・互いが尊重される空間が非常に心地よかったです。今度は是非対面で、、、！！
- ・みんなで話を回しながらゆるゆると語り合えたのがすごくよかったです。

また、今後の「つるぶん café」への要望としても以下のような参加者の声があった。

- ・対面でのお話ができればいいなと思います。
- ・若者（青少年など、適切な表現が他にもありそうな気がしますが…）が都留市についてトークする場。身近な都留について話し合うことを通して、都留の課題はもちろん、都留に留まらず社会全体の課題に私たちがより敏感になることができる場があれば面白いかも…と思いました。

3. 2021 年度の総括と 2022 年度に向けて

オンラインでの開催とすれば、とりわけ2点、つまりは、そもそも通信環境・機器の整備が参加の要件となり、広く地域の方々にご参加いただけないこと、スクリーン上では「つるぶん café」の趣旨に沿った開催ができないことが危惧された。

前者については、“参加したくてもオンラインがハードルとなって参加できなかった”という声は想像するほかないが、実際の参加者からも今後、対面での開催を期待する感想があった。後者については、オンラインでも何とか参加者相互の関係が作りやすいように定員を引き下げたことによって、参加者の声からも確認できたように、オンラインでも十分に成果を上げることができたと考える。

今後の社会教育は、“コロナを乗り越えて”従来に戻ることを想定するのは妥当ではなさそうである。時にオンラインを活用しながら、対面と横断するような「つるぶん café」の開催を考えたい。

（文責：富永貴公）



Aimi. W

II-3. まちづくり研究部門

まちづくり研究部門の目的

まちづくり研究部門では、持続可能なまちづくりを学生とともにデザインし、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践活動に移して地域社会の活性化に貢献し、学生にとって実社会での学びの機会を創出することを目的としている。2021年度は、「富士急行線谷村町駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり」及び「沿線自治体活性化を目指した体験型観光ツアーの実践」の2プロジェクトを実施した。

1 富士急行線谷村町駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり

目的

本プロジェクトは、谷村町駅舎を拠点に地域と大学生との交流・学び・まちづくりの拠点を創出し、中心市街地の賑わいづくりに寄与するとともに、地方鉄道を持続可能なものとして市民が支えるしくみづくりを試みることを目的とする。

事業名称・事業主体

全体事業名

産官学民連携による「谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト」

事業主体（下記5者による協働連携）：

- ・早馬町自治会
- ・富士急行株式会社
- ・都留文科大学教養学部地域社会学科鈴木健大オープンゼミ
- ・都留市
- ・生涯活躍のまち・つる推進協会

実施方法

地域社会学科鈴木健大担当による、全学部全学科の学生を対象にした、オープンゼミとして実施

実施内容

谷村町駅における放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」

コロナウイルスの感染予防として、4・5月は駅舎より広い都留市まちづくり交流センターにて実施したが、閉館時間等の使用条件で中止、その後コロナウイルス第4波、第5波と続き中断が続いた。夏休み中に宿題教室を予定していたが、こちらも中断となった。第5波が過ぎ、12/8にほぼ2年ぶりに駅舎で再開したが、年明けから第6波が起き、わずか3回でまた中断となった。

実施時期：4/14（水）～5/26（水）、毎週水曜日 15：30 - 17：00、計6回

都留市まちづくり交流センター

12/8（水）～12/22（水）、毎週水曜日 15：30 - 17：00、計3回

富士急行線谷村町駅舎

対象学年：小学生

実施内容：宿題の手伝い、ゲーム等（参加人数は概ね毎回5人程度）

そのほか：6/5（土）田植え体験参加、

都留市と富士急行株式会社との「SDGs 推進に係る連携協定」締結式参加

一年間を振り返って

2020年からの新型コロナウイルスのパンデミックにより、2021年度も実施が非常に困難な一年間であった。

実施ができない期間が長く、中断が繰り返され、コロナは2年目となり、コロナ前に通っていた子どもたちはほぼ来なくなってしまった。また、少しでも広い場所として都留市まちづくり交流センターを借りたが、17:00に閉館してしまうことや子どもたちの声が響く、といったことから利用をあきらめることとなった。

長い時間の中断は、スタッフのモチベーションの低下にもつながる。活動ができないため、大学生だけで活動ができないか、と新入生とまちあるきをしたりして議論を続けた。年末に駅舎での念願の再開を果たしたが、コロナのためまたすぐに中断となってしまった。

コロナの状況下で活動自体ができないため、コロナの収束を祈るばかりである。

参加学生 計28名

地域社会学科4年7名、3年1名、2年7名、1年8名

英文学科3年1名、国文学科2年1名、比較文化学科 3年3名



SDG's 協定締結式の様子（2021年6月）



「ぷらっとうす」実施のようす（2021年12月）

2 沿線自治体活性化を目指した体験型観光ツアーの実践

目的

本プロジェクトは、地元鉄道会社及び沿線自治体と連携し、本学と教育・研究活動を継続的・発展的に行い、沿線市民とも連携をはかりながら、富士東部地域全体の発展に寄与することを目的とする。

地方において公共交通インフラの維持・確保は、大きな課題の一つである。沿線人口が減少し、特にコロナの影響でインバウンド観光客は蒸発してしまった状況が続く。地元の鉄道に関心や親しみを持ち、新たな価値を付加して、今後のあり方を考察する。

事業名称・事業主体

全体事業名

(仮称)「地域活性化列車プロジェクト」

事業主体(下記3者による協働連携):

- ・富士急行株式会社
- ・都留市
- ・地域社会学科鈴木健大ゼミ



学生によるツアーポスター

実施方法

地域社会学科鈴木健大担当ゼミ生及び「ぷらっとはうす」有志学生を対象にした、セミオープンゼミとして実施

実施内容

2020年度は、観光及び地方鉄道に関する基礎学習を実施したのち、地域分析やマーケティング学習、他事例研究等を行い、富士急行線を活用した沿線自治体の活性化に資する観光ツアーを企画立案し、富士急行職員、都留市職員、本学職員とともに「研究報告及び企画提案会」を実施した。

2021年度は、具体的な企画案を決め、ツアーの準備及び運営を行った。沿線自治体で若年層世代の転出、特に女性の落ち込みが大きいことから、域外の女性に向けて沿線の魅力を発信すること、また、女性たちのアウトドアブームに係る潜在需要に着目し、市内の山々を観光資源と捉え、新たな観光価値を生み出すことを目的とした。特に、YouTuberである「やまくっく・やぎちゃん」を講師として迎え、インフルエンサーとして数万人単位での視聴につながる広報につなげることを目指した。

なお、都留市市民委員会活動助成金(30万円)の助成を受け、経費の執行に充当した。

(1) 観光ゼミの実施

実施時期: 4/11(月)～12/6(月)、毎週月曜日 18:10～21:00、計23回

※夏季休暇中は、オンラインで8/9(月)～9/20(月)毎週月曜日
18:10～21:00、計7回

実施内容：ツアー企画案立案、富士急行との調整及びプレゼンテーション、関係者及び関係機関との調整・会議、ポスターやパンフレット制作、運営準備、必要備品等購入、当日の運営、アンケート結果まとめ

(2) フィールドワーク

登山体験（高川山、都留アルプス）

(3) 都留市市民委員会活動事業補助金に係る事務作業

事前協議、申請書作成、申請のためのプレゼンテーション、収支及び活動報告書作成、実施報告のプレゼンテーション

(4) ツアーの運営

ツアータイトル：「YouTuber やまっくっく・やぎちゃんと行く！秋の山ガールデビューツアー in 都留アルプス」

ツアーターゲット：20代30代の都内に住む女性

実施日：2021年11/13（土）

募集人員：20名（最少催行人数：10名、参加19名）

ツアー代金：2,800円



はじめの会の様子

ツアー行程：

10:20 都留文科大学（正門）集合

10:20—11:00 はじめの会

- ・やぎちゃん流ストレッチ
- ・やぎちゃんの初心者向け山登り講座
- ・山おやつ（「ならや」のお菓子）配布

11:00—15:00 都留アルプス登山

- ・やぎちゃん監修、「湧水ポーク」弁当
- ・都留の水でコーヒー淹れ体験
- ・やぎちゃんとチェキ会

15:00 おわりの会

- ・都留市の移住に関するパンフレット類配布
- ・アンケート取得



ハイキングの様子

(5) 振り返り会の実施

実施日：12/6（月）

18：10—20：30、25WS 教室

出席：富士急行株式会社、都留市、本ゼミ生



コーヒー淹れ体験の様子

一年間を振り返って

2020年度からの2年間にわたる観光ツアーの企画実施では、主に次の成果があった。

- ・観光地ではない地に、体験型観光として実際に客を誘致でき、市に新しい観光・観光産業の可能性のあることを提示できたこと。
- ・YouTuber「やまっくっく・やぎちゃん」と連携し、顧客の獲得、都留市のPRができ、

インフルエンサーとの連携の効果を提示できたこと。

→ YouTube チャンネル登録者数 2.86 万人 (2022/01/06 現在)

生配信ライブでのツアー告知 11/6、1.1 万回視聴

生配信ライブでのレツアーポート 11/27、0.9 万回視聴

当日のレポート動画 1.7 万回再生 (2022/01/06 現在)

- ・ 県外から若年女性の来訪ができたこと (県内からは 1 名)。
- ・ 参加者から学生による運営に評価が高かったこと。
- ・ 地元企業と連携ができたこと。
- ・ 学生が地域鉄道や観光について学ぶ機会ができたこと。

このような成果が見られたことから、次年度以降の継続に向けて主に次の課題について整理する必要があると考える。

- ・ プロジェクトの方向性及び三者の役割分担の明確化
- ・ 費用負担の整理
- ・ 知的財産の取扱いの整理

参加学生 計 28 名

地域社会学科 4 年 12 名、3 年 11 名、2 年 4 名

英文学科 3 年 1 名、比較文化学科 3 年 1 名



観光ゼミの様子 (2021 年 5 月)



YouTuber やまくっく・やぎちゃんによるツアー記録動画

(文責：鈴木健大)

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－1．第17回地域交流研究フォーラムの開催

都留文科大学 地域交流研究センター
特別支援学級教職課程委員会 共催

第17回 地域交流研究フォーラム

大学×地域の可能性

—地域インクルーシブ教育の取り組みから—

今回の地域交流研究フォーラムは、「大学×地域の可能性」について、地域交流センターの一分野である地域インクルーシブ教育分野の取り組みを参照しながら、皆様と一緒に考える機会にしたいと思っております。地域インクルーシブ教育分野では、主に、特別なニーズのある人たちの活発な居場所づくりの活動「クロボ（クロスボーダー・プロジェクト）」と、特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動「キャリアデザインワーク」の2つの活動を実施してまいりました。

今回は、意見交換に先立って、この5年間、クロボとキャリアデザインワークの運営に携わってこられた、齋藤圭子先生と原まゆみ先生に話題提供いただく予定です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

【登壇者】
齋藤圭子(都留文科大学 特別支援学級教職課程 特任教授)
原まゆみ(都留文科大学 特別支援学級教職課程 特任教授)
堤 英俊 (都留文科大学 教職学部学校教育学科 准教授) 司会

【日時】2022年2月9日(水) 18:30~20:00

【開催方法】Zoom開催(後日URLを送らせていただきます。)

【参加費】 無料

【定員】100名(定員に達し次第、締め切ります)

【事前申し込み】 必要

申し込み方法 ※1名様ごとにお申し込みください。

①大学ホームページの専用ページから申し込み
②右のQRコードから申し込み
③メールから申し込み→ choorui@tsu.ac.jp
※お名前(フリガナ)・年齢・住所・連絡先(電話番号とメールアドレス)をご記入ください。

「受け付けました」という内容のメールが大学から送信されない場合は、メールアドレスの打ち間違い等が考えられます。お手数ですが、地域交流研究センターまでご連絡ください。

申し込み受付中

開催形式：対面とZoomのハイブリッド開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大によりZoomによる遠隔のみでの開催に変更した。

都留文科大学 第17回地域交流研究フォーラム 2022年2月9日(水)

大学×地域の可能性 —地域インクルーシブ教育の取り組みから—

堤

それでは第17回地域交流研究フォーラムを始めます。今年度は「大学×地域の可能性」というテーマでの開催です。司会は私、学校教育学科准教授の堤英俊が行います。

今日の次第ですが、一番初めに開会挨拶を本センター長の北垣先生に行っていただきます。次に、私の方から今回取り上げる、地域インクルーシブ教育の取り組みの全体像についてお話をさせていただきます。その後、クロボ、キャリアデザインワークという取り組みについて齋藤先生、原先生から話題提供いただきます。そして、意見交換を行います。ここでは、齋藤先生、原先生への質問のみならず、『大学×地域』の可能性についても意見交換したいなというふうに思っております。

では、北垣先生、開会挨拶をお願いいたします。

北垣

今日はマスクをしたままのご挨拶になりますが、本日はお忙しい中、第17回地域交流研究センターフォーラムにご参加いただき本当にありがとうございます。これだけ多くの方々に参加していただき本当にありがたく思っています。

地域交流研究センターは、2003年の4月に発足をしました。本学の設立時から市民、学生、教職員による交流活動というものが盛んに行われてきました。地域における教育活動というものもそうですし、地域を博物館に見立てて、人や物、あるいは自然といったものに親しみ、じかに触れる。このような学びを深めていこうという取り組みも、人間探求を掲げる本学の理念に沿うものですし、またそういったものを大切に受け継いで、さらに発展させていこうという目的でこの地域交流研究センターが発足しました。

今日ご紹介をします、地域インクルーシブ教育も、そうしたセンターの理念を象徴する重要で、大切な取り組みの一つです。

今回の第17回目となる本フォーラムでは、「大学×地域の可能性」と題して、地域交流研究センターの一分野である。地域インクルーシブ教育分野の取り組みを参考にしながら具体的に、皆さんと一緒に地域の交流のあり方といったものを考える機会にしたいというふうに思っています。

本日は、これまで5年間にわたって、主に特別なニーズのある人たちの週末の居場所作り活動全体を「クロスボーダープロジェクト」として取り組み、これを私達は「クロボ」と呼んでおりますが、この「クロボ」活動に関わってこられた齋藤淑子先生。そして、特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動、「キャリアデザインワーク」を担当してこられた、原まゆみ先生のお二人にご登場いただき、二つの活動について話題を提供していただくと思っています。

また今日は特別支援学校教職課程委員会との共催ということになります。

本日参加いただいた皆様、そして準備に関わってこられた教職員また学生の皆様にこの場を借りて深くお礼申し上げます。

地域交流研究センターでは、多くの方々のご参加のもと、今後も各種公開講座や交流活動を充実させていきたいと思っておりますが、それには皆様のご協力、お力添えというものが欠かせません。今回のフォーラムを契機に、皆様との新しい交流の輪が広がっていけば幸いです。引き続き、よろしくお願いいたします。

なお、本来ならば、交流の趣旨から見て、対面でフォーラムを行うのが筋ではありますが、今回はコロナ禍であり、全て遠隔での実施というふうになりましたことを、ご容赦ください。このため様々な制約や不自由なこともあるかもしれませんが、その点はお許しいただければと思います。以上を持ちまして簡単ではありますが私からのご挨拶に代えさせていただきます。最後までどうぞよろしくお願いいたします。

堤

北垣先生ありがとうございます。

では、私の方から地域インクルーシブ教育の取り組みの全体像についてお話をさせていただきます。

地域インクルーシブ教育分野ですが、地域交流研究センター共生教育研究部門の中に含まれている活動分野になります。主たる目的として地域の特別なニーズがある人たちや、ご家族たちという当事者の方々への教育・心理的支援と、インクルーシブな地域づくりを推進するという二つを掲げて活動をしています。年によっては、追加して行う活動等もあったりもしますが基本的には、本日、齋藤先生、原先生から話題提供いただく、「クロボ」と「キャリアデザインワーク」の活動を毎年行っています。

まず一つが、「クロボ」です。クロボ活動は大学の学期中、月に1回、土曜日の10時から

3時までという時間帯に、現在は年間6回行っています。

もう一つが「キャリアデザインワーク」です。活動自体はクロボの一部のような形でやっていますが、組織としては「クロボ」と分けて活動しています。内容としては特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動として行っています。こちらの方も学期中に行っているのですが、5月6月7月10月はクロボと同じですけれども、11月については、職場体験を含む関係で別日程で行っています。

さて、少し、地域インクルーシブ教育分野の歴史を紐解きながら、活動をご紹介したいと思います。

この分野は、当初、地域特別支援教育分野という名前でした。分野として立ち上がったのが2015年の4月でした。

クロボは、分野の発足に先立って2014年に私のゼミで立ち上げました。それ以前にも、私の前任にあたる森博俊先生が、ゼミ生たちと「ぶどうの会」という活動を行なっていて、その活動と理念をもう1回再構築するような形でクロボを立ち上げ、それが地域交流研究センターの一つの分野として地域特別支援教育に繋がっていったという形になります。

また、2015年の4月に地域特別支援教育分野を立ち上げたときに、持続可能な運営にしていきたいという思いもあって、その当時の地域交流研究センター長の鳥原先生にご相談をし、運営に協力していただく地域団体との連携協定も結ばせていただきました。その時の写真も地域交流研究センターのブログをたどっていくと見ることができます。

そして、2015年の4月に同じく、本話題提供していただく、キャリアデザインワークも立ち上げました。クロボの午後の時間帯の活動で、本日発表していただく原まゆみ先生が非常勤講師として本学にいられていた時代で、原先生から堤への、山梨県のこころの発達センターの「就労支援ワーク」のような活動を都留で実施したいというご相談を受け、クロボの一部でやったらどうかということで活動が立ち上げられたという経緯があります。

その後2017年の4月に地域特別支援教育分野から地域インクルーシブ教育分野と名称を変更し、同時に齋藤先生と原先生には特任教員として本学へ着任にいただき、特別支援学校の教職課程の開設もすることになりました。この頃からクロボ、キャリアデザインワークを特別支援の実習授業のフィールドにするという流れになり、クロボやキャリアデザインワークに関わり、育っていく学生も格段に増えてきました。今日のフォーラムにクロボ、キャリアデザインワークに関わった卒業生が何人も参加してくれています。

懐かしい写真（クロボのクリスマス会の様子）ですが、この写真は、クロボを始めた当初の2014年12月にクリスマス会をやったときのものですが、この頃は参加者も5名ぐらいで、学生7名、教員1名（私）で、本当にこじんまりとアットホームにやっていたなというところがあって、キャリアデザインワークのほうも、参加者4名、学生3名、教員は、原先生と私の2人で活動していました。

それが今は、参加者40名、学生ボランティア50名で、教員3名が運営者として、活動しています。安全面も含めて、右往左往しながらもやっていて、この8年間で、ものすごく規模が大きくなったなという印象を持ちながら活動をやっているところです。

一応簡単にクロボの1日の活動をお話しておく、クロボは、10時に集まってから、「はじまりの会」をし、午前はスポーツ活動で、全員でダンスとかパラスポーツ活動とかをやりながら体を動かし、午後はグループ別に活動をしています。その一つとして、キャリアデザインワーク活動をおこなっている形になっています。

では、ここまでお話ししたクロボの全体像をちょっと頭に入れつつ、この後、齋藤先生、原先生のお話を聞いていただければなというふうに思います。それではまずは、齋藤先生の方からクロボの話題提供をお願いいたします。

齋藤

皆さん、こんばんは。クロスボーダープロジェクトを堤先生と一緒に担当させていただいています齋藤淑子と申します。先ほど紹介ありましたように、5年前に都留文科大学に特別支援学校教職課程が開設され、私は主に病弱教育を教えています。

最初に自己紹介させてもらいます。私は1952年に山梨県の南アルプス市で生まれ育ちました。特別支援教育（当時は養護学校）の先生になりたくて、東京の大学に入学し、その後は東京都の特別支援学校に勤務し、肢体不自由教育に13年携わった後、病院に入院中の子どもたちの教育、病弱教育に携わってきました。東京には高度専門医療の病院が集中しているので、全国から重い病気を抱えた子どもが入院しながら学んでいます。

私にとって、故郷山梨の子どもたちや社会人と一緒に活動するこのクロボは、大変有意義で楽しい発見がありました。クロボについては、堤先生からお話がありましたので、私からは、具体的な活動内容と私が心がけていたことについてお話ししたいと思います。午前中のスポーツ活動には、参加者40人、大学生やボランティアたちも入れて全部で100名ぐらい集まります。朝の会をした後、体育館に移動し、老若男女、子どもも社会人も飛んだり跳ねたり走ったり、みんなで大きな輪になって、エネルギーに活動します。私は最年長ですが、普段は6000歩を目安に歩いていますが、クロボの日は一万数千歩にもなります。参加者の中には、不登校の生徒さんもいます。お母さんが、「本当に久しぶりに娘の走っている姿や他の人と語り合っている姿を見ました」と、涙ぐみながら話してくださった姿が、とても印象に残っています。娘さんの方は、いつも「つまらない」と言いながらも大学生と一緒に息を切らしながら走っているのです。そうしたなかで彼女も「大学って面白そう。私も大学に行こうかな」と、夢や目標が生まれたようです。

この活動を通して、それぞれに何かが生まれている。そんな気持ちがしていました。またエネルギーな大きな活動の傍で、小さな活動も生まれています。私が心がけていたのは、それぞれの良い時間が止まらないよう、滞っていた時間が再び動き出すようにすることです。時には一緒に小さな輪に入ったりしていました。このポスターに「クロボる？」と書いてありますが、そうした小さな活動の様子を表しています。大きな流れに乗りにくい子には、トランプ、折り紙、お絵描き等いろいろなものを用意して、まずは子どものペースを大切にするようにしています。

最初は、学生と小さな輪で過ごしていた子どもも、中学生になってフロアホッケーの上級者コースで汗を流している姿を見ると、まずは安心感に支えられながら居場所を作ることがとても大事だと思います。小さな輪の中で子どもは力を蓄えながら、居場所をもっと大きく変化させていくのだと思いました。

これは、午後のアート活動です。子どもの想像力の豊かさには、しばしば驚かされます。子どもたちは作った作品をお家に持ち帰るのを楽しみにしています。すぐに持ち帰れない作品もありますが、次は絶対持ち帰りたいというお子さんが沢山います。お母さんから「中学生になった今でも小学生の時に作った作品を自分の部屋に飾ってあるんですよ。」とお聞きしました。作品を通してクロボでの楽しかった時間を思い出して、明るいエネルギーにしているのではないかとすると、とても嬉しいです。

(写真：大学周辺を探索している様子)

この写真の真ん中に北垣先生が写っています。「都留フィールドミュージアムへようこそ！」と、自然・環境活動の事前準備として、大学の周辺を散策しながら葉っぱやツルなどを集めている様子です。今、コロナで自粛期間が長くなっているため、学生たちも大学の周りを歩く機会も少なく、「初めて来ました」と楽しそうです。北垣先生が、一つ一つ丁寧に植物について説明してくださるので、私も学生たちも目を見張る思いで聞きながら、素晴らしい時間になっています。集めてきた材料を使った子どもたちの作品です。1号館の特別支援学校教職課程室の前は、ミニミニのフィールドミュージアムになっています。

(写真：クロボの音楽活動の様子)

こちらは音楽グループです。教育フィールド研究Ⅱの授業で2年生が音楽プログラムを作ってくれています。イントロクイズ、リズムあそび、季節の歌、楽器づくり、合奏、楽器体験、パラバルーン、ピアノの生演奏、鑑賞等、とても楽しいプログラムを毎回用意してくださっています。クロボという場だからこそできる「音が苦」じゃない、楽しむ音楽にしたいと頑張っています。

イントロクイズはピアノが上手な学生がJポップ、アニメ、クラシックといろんな曲を次から次に弾いてくれ、その度に子どもたちが、息を詰め、耳を澄まして聴いていました。目がキラッと輝く瞬間を目の当たりにして、私も心が浮き立ちます。学生たちは子どもと文化を共有する幅が広いといつも感心させられます。

【ハンドチャイムの演奏 VTR】

黒板の歌詞カードには、自分がどこで鳴らすのか、自分のハンドベルと同じ色で鳴らす場所がわかるように書かれていて、一発で子どもが合わせる事が出来るように工夫しています。

【十川先生の演奏キラキラ星】

最後のクロボの音楽活動ということで十川先生がピアノ演奏をしてくれました。先生の手元を見つめる子もいますが、足のペダルテクニックをずっと観察する子どももいます。子どもたちは、息を飲むような感じで聴き入ったり、中には学生さんたちの膝ののってリラックスしながら聴いたりして、まさにそれぞれのスタイルで身近に生演奏を聞けるすばらしい機会となっています。大きくなったらこんなことやってみたい、あんなことやってみたいという、夢が広がる時間です。そういう意味でクロボの活動が、大学、地域、子どもたちを繋ぐ貴重な機会になっているのではないかと思います。

参加している子ども、保護者、社会人に「クロボの活動についてどう思いますか」と、ご意見を聞いたら良いと思うのですが、なかなか時間が取れず、今後の課題だと思っています。

学生たちは毎回反省会をしたりレポートを書いたりしています。これまで、クロボの活動にたくさんの学生が参加し、特別支援教育に興味を持ち、まさに特別支援教育入門の役割を果たしているように思います。ここでは、学生の感想の要点を紹介します。

学生①クロボの活動を参加者が楽しみにしているということ、そして地域の人、保護者の人、大学の先生、いろんな人の支えがあって成り立っていることを感じる。

学生②自分の家族が特別支援学校に通っていて、きょうだいやクラスメイトとの関わりから障害についてはある程度知っているつもりだったけれど、自分はその人たち以外のことには知らないし、障害がある人のことは障害者として、先に見ていたと思う。クロボでたくさんの人と密に1日関わると、自分の思う障害とは違った部分が多く見えてきて、自分の中の偏見にも気がつくことができた。

学生たちは、改めて一つの活動が地域をはじめ、たくさんの人に支えられていると感じ、いろいろなニーズを持っている人たちと触れ合う中で、自分の障害観を問い直したりします。クロボは、大学1年生が担当しますので、学生たちにとってこの体験が今後の学びの糸口となり糧になっていくように思います。

私自身も、自分の教育実践を振り返る良い機会となりました。「現場から学ぶ」という視点を大切にするスピリッツは、都留文科大学の大きな柱であり特徴だと思いました。地域交流研究センターのルーツをもっと知りたいと思い、堤先生の前任者で地域交流センターの創設期にいらした森博俊先生にお聞きしたところ、初期の交流センターの機関紙1～5号を送っていただきました。この機関誌の写真がどれもすばらしくて、カメラマンは誰だろうと思っていたところ、北垣先生でした。

次の言葉は、初代のセンター長の今泉先生の言葉です。とても大事なことをおっしゃっていると思いました。

「性急な世界史の奔流の中であって、ともすれば見がちな自己と世界の結びつきを、私達は身近にある地域との関係の問い直しによって、再生していくのであって、地域であって、空気や水のように当たり前に見えるものほど、実は人と生き物にとって大切だということに気づく術と技を身につけていくことが必要でしょう。」

当たり前と思っていること、それがどんなに大切なことなのか、今このコロナ禍の中で、私達は改めて気づくことがたくさんあると思います。先ほどもお話ししましたが、私は、東京の病院に入院している子どもたちの教育に携わってきました。病院は、身近に人や生き物、自然に触れることが難しい環境です。だからこそ、そのことがどんなに大切なことなのかを改めて気付かされる場面がたくさんありました。

入院している子どもたちは、地域や学校から離れて、病院というそれまでの生活とは切り離された世界の中で過ごすことを余儀なくされます。こうした厳しい状況の中で、時には孤立感や無力感に苛まれ、「あっち行け！」なんてネガティブな言葉を言われることもあります。子どもが教育実践に何を求めているのか、今どうすればよいのか、常に問われます。地域での活動、自然の中での活動、仲間同士の活動、こうした「当たり前」に見える活動が、「実は人と生き物にとって大切」であることに気づかされるのです。

私が最初に勤務した都立清瀬小児病院（今は府中に移転しました）の分教室は自然に囲まれた療養所的な環境でした。その中で、子どもたちはいろんな発見をしていました。

小6の朝倉さんは作文で「外に出ればトンボが飛んでいて、下を見ればアリが働いています。すべてどこにでもあるような風景ですが、実際は少ないと思います。病院だからこういう環境があるのかもしれない。今回の入院ではこの他にもいろいろ考えさせられることがありました。たまには視点を変えてみる方がいいのかなと思いました。」と書いています。朝倉さんは骨髄移植のため無菌室で図鑑を見ながら動物、植物等を描き続けました。身近に生き物や自然の力を感じていたからこそ描いていたのでしょう。ちょうどその頃、アメリカのいくつかの小児病院を見学しました。意識的に自然や生き物に囲まれた雰囲気や環境を作り出そうとしていることに驚かされました。こうした環境が、子どもの生きる力を支えるのだと思いました。そして自分の足元にこんな良い環境があったことにも気づかされました。

次に勤務した大学病院の分教室で、「総合的な学習の時間」のテーマがなかなか決まらない中学生に、清瀬分教室で取り組んでいた植物を育てる写真を見せたところ、「僕もこういうのをやりたい。バケツ稲づくりをやってみたい！」というのです。でも場所が見つかりま

せん。大学病院の中をあちこち探して、なんとか屋上で育てる場を見つけました。その年は冷夏でしたが「うまく育ちますように」と祈るような思いで育てていました。

これはがんセンターの12階です。子どもに良い病院環境を作ろうと、お医者さんたちが、病院の中庭に植物を植えるスペースを作ってくれていました。これは聖路加病院での活動です。痛み止めを打ちながら2重、3重に手袋をし、お母さんに付き添われて、バケツに種芋を植え付けました。「みんなと一緒にやりたい、植物を育てたい」という思いは、子どもにとって根源的な欲求なのではないでしょうか。でも教員が意識的にこうした活動を行い、環境を維持していかなければ、どんなにスペースがあってもすぐに草ぼうぼうになってしまいます。植物園芸療法の専門家の力をおかりしながら教室の前に植物が成長する姿を感じることできる畑を作りました。



院内学級から窓の外の学級園で育てている大根を引っ張り上げている（収穫の様子）

私達教員は、こうして病気の子ともとの外の世界とを繋ぐ役割を果たしているのです。「当たり前」にこうしたことができる中にいると、このことの大切さがかえって見えないのかもしれないかもしれません。病院を「フィールドミュージアム」にしていく発想を、クロボの活動から、地域交流センターから教わったように思います。

ご清聴ありがとうございました。これからもクロボをどうぞよろしくお願いします。

堤

齋藤先生ありがとうございました。そしたら次に原先生、お願いいたします。

原

皆さんこんにちは、原まゆみです。よろしくお願ひ致します。

私は、先にクロボで堤先生の方からご説明いただいた、キャリアデザインワークを担当してきましたので、そのことについて今日お話をさせてもらいたいと思います。

発達障害などのある若者は、自己肯定感や将来イメージがなかなか持てないまま学校を卒業してしまうため、社会生活への移行につまずきやすい問題を抱えていると思います。彼らには、思春期から参加できる援助実践が必要だというふうに考え、思春期キャリア支援プログラムの研究開発を目的として、このキャリアデザインワークの実践を本学では積み重ねてきました。

キャリアデザインワークは当事者の将来イメージを形成する体験的な学びと保護者の語り場が主な活動です。このプログラムには先行実践がありまして、初期段階では「就労支援ワー

ク」という、わかば支援学校やこころの発達総合支援センター主催によるワークショップです。この立ち上がりから今年でもう15年になります。本学のキャリアデザインワークは当事者を真ん中にして、学生の皆さんと保護者、運営委員、地域の事業者の皆さんと共に、実践研修、研究を重ね、5年の節目を迎えることができました。

本日はこの概要を紹介するとともに、ここで積み重ねた実践の研究結果を報告して、思春期キャリア支援プログラムに求められる新たな実践モデルを提起したいと考えています。やや固苦しくなるかもしれませんがどうぞお付き合いください。

研究のテーマは、思春期キャリア支援プログラム「キャリアデザインワーク」の実践検証と展望です。キャリアデザインワークの枠組みについては、堤先生の方からお話がありましたように、特別支援学校の教職課程とそれから大学の地域事業と2本柱で構成されています。学生がプログラムの企画運営をフィールド研究として担当し、運営委員として地域の専門家の方々が入ってくださっています。また、ワークで行う職場体験もありますが、地域の事業所にご協力いただいています。キャリアデザインワークの目的は「どんな大人になりたいか、大学生で仲間と一緒に考えてみよう」「どんな仕事が向いているか、職場体験をしてみよう」「将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう」としており、当事者と大学生と地域の方々とのこのプログラムを進めています。

今年度の実施内容は表にありますように第1回から6回までとなっており、第1回5月には新しい学生達や参加者と、自己紹介や仲間作りをしました。第2回6月は引き続き仲間作り、それから職業への関心を育てるような活動。7月には大人になるってどういうこと、仕事について調べてみようというような活動、そして秋に行う職場体験場所はどんなところに行きたかというアンケートもとっています。後期になって10月には、社会人になるためにはどんなことが必要かなということで、今年は職場体験に行ったときの自己紹介を兼ねた名刺を作るというようなことをしました。また、自分が体験に行く場所を知ろうということで事前の学習も行いました。11月には実際の職場で1日体験をして、次の日にはその体験の振り返りや1年間の振り返りを行うという流れで行いました。

職場体験先については、コロナ禍が続く中でも昨年も今年も深いご協力、ご理解いただいています。今年は宝オートサービス様、老人ホームの里様。ほしのさと工房様、いちごいちえ様、文大図書館の5事業所で体験を受け入れてもらいました。また去年までは、曾雌にんにく生産組合様、不二家桂店様、なかのや食堂様などにもご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

これはワークの活動の様子の写真の一部です。みんな元気よく活動に参加している様子が見られると思います。



保護者の語り場につきましても今年は3回行いました。特にテーマを設けなくても、保護者の皆さんから進路について、生活の様子やトラブルのあり方、悩んでいること、などたくさんのお題が、もうあふれるように話されて交流しています。ここに運営委員の方が入ってくださったり、大学生も入れてもらったりしています。

次に研究報告としてどのような内容を研究してきたのかについてお話したいと思います。少し堅苦しくなるかもしれませんが、まず、発達障害を取り巻く問題背景について検討をしました。ここにあるように、①発達障害って、どんなふうに定義されているものなのだろうか、この概念はどのように形成されてきたのだろうか。また次に、②各統計では発達障害等が非常に増加していることになっていますが、その意味は何だろうか。そして、③学校から社会への移行期に支援する政策はどのようなものがあるのかについて調査検討しました。

次に、こういった問題に関わる先行研究を検討しました。この先行研究の分析から、支援実践に求められる四つの構成要素が抽出されました。まず自分を作っていく「1. 自分づくり支援」。社会的な自己であること、社会的に自分が存在していることへの気づきを支援する「2. 社会的自己の気づき支援」、次に「3. 狭間問題への対応」が必要であること。いろいろな意味で、思春期の課題のある子どもや若者たちは狭間におかれているという問題があると思います。最後に「4. 地域協働の構築」です。この四つの構成要素を支援実践に求められる理論枠組みとし、キャリアデザインワーク実践検証の参照枠組みとして用いました。

実践検証に用いた分析資料は次の通りです。分析資料には、学生たちが丁寧に実践を記録したものがああります。自分が学んだこと、自己の学びやまとめ、課題レポートを作成したり、当事者の参加記録、プログラムについての反省会の記録。当事者の感想や、保護者の語り場の内容、運営委員の意見、筆者のフィールドノーツなどです。こういった資料を記述して分析した結果、キャリアデザインワークには先ほどの理論枠組みの四つの構成要素が含まれ、それ以外にもオリジナルな3つの構成要素が含まれているということが明らかになりました。その3つは「5. 保護者のエンパワー」、「6. 同世代の若者の関与」、「7. 思春期からの参加」という要素です。

検証の内容から浮かび上がってきた参加者の思いの分析結果は次のとおりです。当事者は、前向きで肯定的な意見を持っていて、ワークを楽しみ、徐々に進路を考えるようになっていきます。保護者は、大学生との関わりが当事者を支えているなど実感し、一方で、やっぱり社会参加に向けた不安な思いを抱え続けているということが見えてきました。また運営委員は、

やっぱり大学生の存在に大きな意味があるというふうに言ってくださっていることと、社会が障害理解をどういうふうに進めるかという問題、それから高校の特別ニーズへの対応にも問題意識があるということが明らかになりました。大学生自身は、当事者や保護者理解を深めています。そして、自分の将来に関連づけて、学校教育の課題に気づき、ワークの意義を問い直して、当事者が早い時期からワークに参加するということは意味があるんだということを提案しています。

実践構造についてはこれまでも述べたように、運営構造が地域事業と教職課程の二つの柱を持っていること、そして外部の方々に協力をいただいているという地域とつながる大きな構造であることが確認されました。そして、当事者ワークではこういった成果があり、保護者の語り場でも、我が子の養育の様子や進路の悩みなどが自由に話され、他で話すことができない想いを語る場になっているということが明らかになっています。

ここでキャリアデザインワークにも含まれる七つの構成要素について、少し説明をしたいと思います。

① 自分づくり支援

思春期の若者たちは自分作りの時期にあるということだと思えるのですけれども、大学生による当事者の丁寧な内面理解が行われていて、柔軟にプログラムを作り出す企画運営の仕組みもあって、そういった中で、当事者が信頼と安心の居場所が持たれている。生まれているということが言えます。

② 社会的自己の気づき支援

働く体験がプラスの体験となり、自己有用感を育てること、これは、就労支援ワークにその源流があったというふうに考えられます。また他者との繋がり、社会的な自己に気付いていくこと。将来イメージの形成により、職業への憧れや、生活の意欲を育むということになる、ということが浮かび上がってきます。これも就労支援ワークから引き継がれている要素です。

③ 狭間問題への対応

通常の学校と特別支援学校のはざまで、学び損ねるキャリア教育を補完しています。これも就労支援ワークに源流があります。プログラムに「障害」という表記がなく、支援者ではなく同世代の若者である学生たちと活動するために、当事者や保護者が身構えずに参加しやすいこと。また、保護者の語り場によって、狭間の葛藤と不安が支えられて、支援を受けることへの拒否感が和らぐことから、「狭間問題への対応」の要素があります。

④ 地域協働の構築

キャリアデザインワークは大学の役割を生かした地域実践の探求を目的としていますし、地域の専門家による連携と協働が行われています。高校や福祉や労働のネットワークなどが試みられてきました。地域の事業所の協力を得て、職場体験を実施していますので、まさに「地域協働の構築」が行われています。

また、オリジナルな3つの構成要素は次のとおりです。

⑤ 保護者のエンパワー

保護者が運営にも関与し、当事者ワークには入らないということで、支援者や我が子との対等な関係性を築いていくこと。語り場を通して心の安定につながりエンパワーすること。そして保護者自身のコミュニティが形成されるため「保護者のエンパワー」という要素があります。

⑥ 同世代の若者の関与

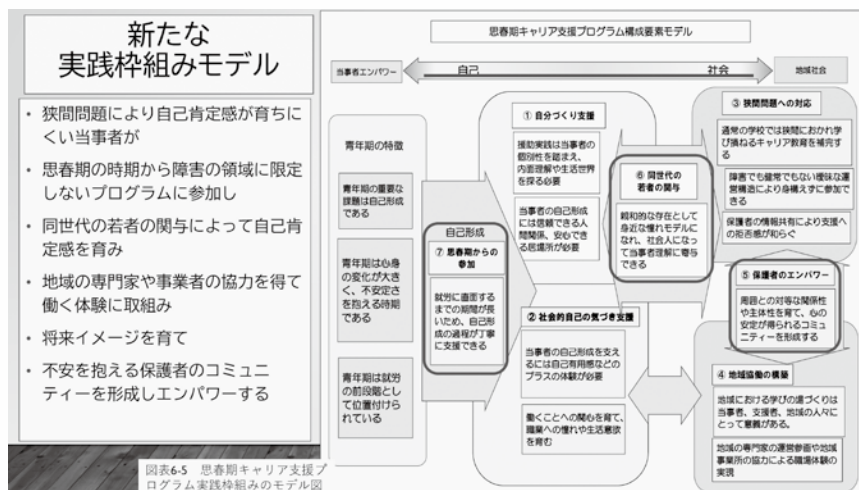
学生の関わりが指導的支援者的にならず、1人の若者として同じ地平に立って活動していることから、思春期青年期の当事者の身近な憧れモデルになり、将来イメージの形成に寄与できること。そして、学生が教員の卵として将来教員になったときには、発達障害等のある子どもへの理解の幅が広がることから「同世代の若者の関与」という要素があります。

⑦ 思春期からの参加

在学中の思春期から参加できるキャリア支援プログラムは、ほとんど見当たりません。思春期から参加することは、就労に直面するまでの期間が長くとれること。また不安定になりがちな自己形成の過程を丁寧に支援できること。そして、移行期である学校から社会への移行の場面で支援の基盤になることは重要な意義があり、「思春期からの参加」は欠くことのできない構成要素であると考えました。

以上の7つの構成要素の関連を考えながら作成したものが、思春期キャリア支援プログラム構成要素モデル図であり本研究の成果です。自己に向かうベクトルと社会に向かうベクトルを持ち、①～⑦の要素を持つキャリア支援プログラムが求められていると考えております。つまり「狭間問題により自己肯定感が育ちにくい当事者が、思春期の時期から障害の領域に限定しないプログラムに参加し、同世代の若者の関与によって、自己肯定感を育み、地域の専門家や事業者の協力を得て働く体験に取り組み、将来イメージを育て、不安を抱える保護者のコミュニティを形成し、エンパワーする。」という新たな実践枠組みモデルです。

発達障害等のある若者の支援は直面する就業や就労の支援、職業準備訓練などの就労に向けた施策が講じられていますけれども、狭間問題に由来する学校時代からの失敗体験の累積から不全感を抱え、社会参加につまずいたまま支援の窓口にもたどり着けない若者がいることが明らかになってきています。そうなる前に、彼らが自己肯定感を育て、自分らしい生き方を模索する力を育む必要があると考えています。この実践の枠組みモデルが活用されることを提案したいと思います。



図表6-5 思春期キャリア支援プログラム実践枠組みモデル図

終わりに、この実践を中心に担う学生達について触れたいと思います。このキャリアデザインワークは特別支援学校教職課程の選択科目「特別支援フィールドワークⅡ」となり、2021年度の履修生は18人と倍増しました。学生の主体的な学びの成果は、毎年発行してい

る「キャリアデザインワーク活動報告書」に掲載する学生レポートにあるとおりです。企画運営と合わせて丁寧な反省と考察を積み重ねてきました。ここで学んだ経験をもとに、全国で教職に就いて活躍している先輩も大勢います。今日参加してくれている先輩がいると思います。学生たちが当事者、保護者、地域の運営委員や職場体験の事業所の皆様から貴重な生きた学びの機会を得られたことはいうまでもありません。改めて関係の皆様へ感謝申し上げます。

キャリアデザインワークはこうした多様なフィールドの方々と一緒に地域協働実践を作り出してきました。今後もキャリアデザインワークが本学と地域の連携と協働のもとで充実発展できますよう、よろしくお願い致します。長い時間ご清聴ありがとうございました。

堤

原先生ありがとうございました。

それでは、あと残り30分ほどになりますので、早速、意見交換の方に入っていきたいと思います。

ここからの意見交換なんですけれども、参加者の皆様のご意見を多く聞きたいということもありまして、チャットでどんどん意見を出していただきますようお願いいたします。

【意見交換】

「クロボ」や「キャリアデザインワーク」に関して（あるいは齋藤先生、原先生に対して）何か質問、感想などありませんか？

・保護者の方

「クロボ、キャリアデザインワークに出会えて、社会との繋がりができて本当に良かったです。」

・日向先生

「一般の学生にもキャリアデザインワークなどは必要だと思いました。コロナでデジタル化されたキャンパスの中で改めて行う必要があると思いました。」

・匿名

「立ち上げにあたってどんな点に苦労されましたか？」

→立ち上げにあたっては、特にビジョンの共有の部分で苦労しましたね。（堤）

→キャリアデザインワークは先ほども少し触れたのですが、長い経緯があります。思春期のプログラムは15年前に保護者のSOSがあり、特別支援学校の仕事体験を通常の学校の子どもたちにさせてもらいたいという申し出から、わかば支援学校が事務局になって、いろんな方と連携しながら、立ち上げてきたという歴史を持っているワークです。そして、当時のころの発達総合支援センター所長の本田秀夫先生が、県の事業としてやろうと考え全県下を対象として拡大しました。その過程でだいぶ整理されて展開しましたが、事業はいずれ終わることとなりました。

その時に私が都留文の非常勤をさせていただいていて、堤先生にこういうワークをやらないかと、声をかけさせていただきました。そして、「いいですね、やってみましょう」というふうになり、あの柔らかい中でクロボの一部の子たちと学生を対象者にし

て始まりました。試行期間が2年ぐらいあったかなと思います。そのときは学生の関心がなければいけないよね、どういうふうにして定着していくのかなって、すごく先行きを心配していました。その頃、都留文に特別支援学校教職課程を作ることになり、2017年からは私が特任教授として採用されました。大学はフィールド研究が大事なんだってということで堤先生も多分力を入れてカリキュラムの中にこのフィールド事業を組み入れてくれ、私の科目は選択科目だけど、それでもこの科目をとおして実践に深く触れたいっていう学生たちが履修してくれて、一定程度安定する中でワークを作っ
てこられたなというふうに思っています。

あと、地域の方々と繋がっていくってことについては本当に手探りで、いろんな関連する専門家の方たちにお声をかけながら、職場にも訪問してお願いをしながら、やってきたなと思います。やっぱりフィールドに出て行かないとわからないことがたくさんあるので、私自身も勉強になりました。この5年間の中で、スタートのときには本当に先が見えないような感じで、どういうふうに授業を作っていけばいいのかな、前期の授業なのに通年でやるのか、みたいないろいろ問題がありました。学生たちもみんな頑張っ
て取り組んでくれるようになったなあとと思います。(原)

堤

ありがとうございます。

さらに、ご意見をピックアップさせていただきます。

・匿名

「クロボでの取り組みキャリアデザインワークの取り組み素晴らしいと思います。私はこども食堂でボランティアを行っていますが今回の講演の取り組みを参考にしてこども食堂のパートにも取り入れていきたいと思います。」

・卒業生

「本日はありがとうございました。特支課程の卒業生です。クロボもキャリアデザインワークも学生時代の自分だったら直に子どもと関わることのできる貴重な機会だったし、同じ課程の仲間と先生と近い距離で学んでやることができた大切な時間でした。」

・匿名

「キャリアに参加することで支援者という立場ではなく同年代の人たちとして関わることも大切だということを学ぶことができました。

保護者の語り場では具体的にどのような話が出ていたのでしょうか。そのときに原先生はどのようなことを心がけて言葉かけをしていましたか？」

→一つ目のその同世代の若者が関わるというところは非常に大きな要素だっていうふうに私も改めて感じています。自分は障害があるのか、いや自分は障害者じゃない、というようなまだまだ自分をつかみ切れていない時期に、支援者や専門家の支援を受けるっていうことはとっても抵抗がある。そういう時期に同じ若者の大学生と一緒にやるということは、壁がなく参加できて良い意味があるなあと、まさに大学でやるべき実践だなと思います。

もう一つの保護者の語り場ですけれども、これは以前やっていた就労支援ワークで

も保護者の学習会あったのですが、その時はテーマに沿って保護者が学ぶという枠組みだったんです。わたしたちのキャリアデザインワークは保護者に何かを学んでもらおうということではなくて、保護者が自由に語れる場を作っています。保護者が仲間と出会うことが必要なのではないかと、運営委員の方に言っていただいて、2年目からこの組織を立ち上げました。保護者の方は自由に喋ってくださいという形で進めています。次から次へと自分が今までどんなふうに苦労して子育てしてきたか、嫌な思いをしたかとか、それから学校の先生とどういうふうに付き合ったらいいのか、進路はどういうふうに考えていったらいいのか、高校がいいのか、特別支援学校がいいのかなど、たくさん話されていました。正解がないので、相互に話を聞く中で、自分の中での方向性を見つめ、見つけるってというような場所になっているなど感じられました。私は正解を言うなんてことはないし、聞かせてもらって、何か私も胸がいっぱいになるってというような、そういう立場でやっていました。学生も入らせてもらったりもしていました。(原)

ありがとうございます。

齋藤先生も、かなり保護者の方とコミュニケーションとられてこられたので、齋藤先生いかがでしょうか？(堤)

実際、なかなか保護者の皆さんとその時間の中で喋ったりというのはなかなかないのですが、体育館の片隅で元気ですか？みたいな感じで話をしたりとかそういうことはあります。特に出席を取るとき、今回こういうものがありますよっていうお誘いをする係になっていて、そういうときに、今度行きますみたいな感じで来て、そこから最近どうですかみたいな話をしたりということはあるのですけれど、さあ語り合いましょうみたいな状態でお話をしたことはあまりないので、そういう時間が設定されるといいなと思います。きっと話したいことはたくさんあるのだろうなと思います。特に、キャリアの方は思春期なんですけど、小学校一年生とかも来ますので、そういう方達はまた子育てっていうところで、どんなことで悩んでらっしゃるのかなってことなどをお聞きしたいなと思うし、これからそのところも、スタッフがいればできるのかなって思うところです。(齋藤)

ありがとうございます。本日のテーマが『大学×地域』ということですので、それに少し軸を戻して、考えたいと思います。都留文科大学のヒト・モノ・コトと、都留市や都留市近隣の地域っていうものに関わることに具体的にどのような可能性があるっていうふうに思いますでしょうか？先ほど立ち上げに関する質問があったんですけど、その立ち上げのときに私が一番初めに行ったことは、地域の方々に会いに行くことでした。なじみの関係が地域の中にどんどんどんどん広がっていく中で、それと連動してクロボやキャリアデザインワークの活動自体も豊かになっていったなって思うところはあります。(堤)

国際教育学科の質問をされている方がいらっしゃるんですけど、私は国際教育学科のお話がわからないのですみません。(堤)

・匿名

「だから多くの大学生が実際に運営係いろんな形で会うことで学びをとっても大きいと

思います。年間の活動は数回ですがその準備事業の中で行われているんですか？」

→キャリアデザインワークもクロボもいまは授業化しているので、授業化といっても特定の時間に時限に作っているというか、フォーマルな形ではなく、空き時間を見つけて、集って準備をしていくってというような形でやっているの、どこまでが授業でっていうのはなかなか切り分けが難しいですね。(堤)

→そうですね。授業の中でですね。北垣先生も休みに出てきていただいて、何か学生たちをと連れて行っていただいたりとか、これは全くの授業外だと思うのですが、そういう準備をしながら結構色々な話ができるという点で、特別支援教育の1219って部屋があるのですが、そこは何か本当に常にいろんな学生が準備に来ているという感じです。(齋藤)

すみません。残りの時間が少なくなってきましたので、できれば『大学×地域』についてご意見を。

先ほどの国際教育学科に関する質問に対しては、原和久先生がチャットでお答えになられているので、そちらをご覧ください。(堤)

・匿名

「まず障害に対して理解が広がり深まっていくっていうふうに思います。その結果障害者雇用に繋がったり良いことはたくさんあると思います。」

他いかがでしょうか。この地域インクルーシブ教育分野の活動にかかわらず、大学が、地域と何かをするっていうことにどのような可能性があるかっていうのを、自由に書いていただけると。なかなか難しいテーマですけどせっかくこういうフォーラムですので。(堤)

・日向先生

「地域交流研究センターの活動として学科を超えて参加することができますので是非入学後、地域交流研究センターにお越しください。」

→都留文科大学は、大前提としてたくさんの学生が都留市内に住んでいますので、地域に関わるってこと自体、住民として関わるって側面もありますね。(堤)

・匿名

「地域資源が変わることにより地域と切り離されない地域社会の中に居場所があり続けるための基盤作りとなると感じます。」

・匿名

「職場体験等を地域で行うことで、特別なニーズを持っていてもこんなことができる、こんな人もいるんだと、地域の人に理解、感じてもらえることができるのではないかと思います。大学生も地域と密接に関わる機会を通して、地元と都留との違いや共通点に気づくことができ、自身の地域ではどうなのか。どう実践していけるのかを考えることができると思います。」

堤

そうしましたら最後に、齋藤先生と原先生に一言ずついただいて、意見交換を閉めようかなと思います。齋藤先生いかがでしょうか。

齋藤

私もこの地域から離れていたその教育実践現場から、その地域ってこんなに豊かな資源があるんだなってことを改めて実感したっていうことでした。人・物・事・自然ってというのは、北垣先生が言うように本当に、フィールドミュージアム。発見がたくさんある場なので、でもその水先案内人というか、そういう人がいないとなかなかこう見えにくいっていうところもあると思うので、それをぜひ身近な人が発信源になっていくってことが大事なのかなって言うふうに思いました。ちょっと抽象的なことで申し訳ありません。

堤

ありがとうございます。原先生いかがでしょうか。

原

なんかすごく大きいテーマなので、なんて言ったらいいかなと思ったのですが、私は北杜市に住んでいるんですね。それで都留市に入ってみたらまあ、この大学があるということと地域が盛り上がっているっていうことが、すごく大きいメリットだなあというふうに思いました。だから都留文科大学を都留市が育てるといふか、それにきちんと都留文科大学も地域に応えるってような強い繋がりを、これからもさらに深めていく必要があると思います。私もここに居住していないので、居住していればもっとそこの職場の方や、いろんな方と繋がりが持てるのに、まだまだ不十分だなと思います。学生さんもぜひそういう観点で、自分の存在をこの地域に根を生やして4年間暮らしたらいいと思います。

堤

ありがとうございます。

一つ感想が来ました。「地域の人に知ってもらう、感じてもらうことで新しい感覚を持った人が思いがけない何かを連れてきてくれるのではないかな。そこから何かできるのではと考え実践する機会が増えるのかなと思いました。」って言うふうに考えて書いてくれています。短い時間でしたけれども、意見交換はこのぐらいにして、またこれをきっかけに様々な考えを深めていっていただきたいなというふうに思っている次第です。

フォーラムも終盤になってきました。実は齋藤先生、原先生は、あのこの3月に任期を終えられてご退職という運びになられます。ですから、実は今日の話題提供っていうのも、その最終講義的な発表でというようなお願いをさせていただいて、やっていただいたっていうところがあります。本来今日 Zoom でなければ、花東セレモニーでもやりたいと考えておりましたが、それが叶いませんでした。ただ、その代わりに今回のフォーラムの共催先になっている特別支援学校教職課程委員会の方から、委員長の中川先生に一言いただきたいと思えます。

中川

齋藤先生、原先生、とても興味深いお話をしていただきましてどうもありがとうございます。

した。また参加の皆さんからのご意見がたくさんあったということで、とても皆さん関心が高いタイトルだったんじゃないかなというふうに思います。

クロボと、キャリアデザインということで、学生さんも参加されての企画になるのですが、そこに発展的にお二人の先生、また堤先生や筒井先生、いろんな方々が寄与していただきまして特別支援の免許状を出すことができているということになるかなと思っています。学生さんはクロボに参加して初めて、障害者の方と接するっていう方もあるんですが、それが特別支援の免許状を取る始まりっていうことで貴重な経験になっているんじゃないかなと思っています。そして、実践しながら2人の先生からご指導いただいたことっていうのは、本当にいろんな感想もきていたように、とても身になるものであり、一生の宝になったんじゃないかなというふうに思います。お二人の先生方と私と、5年間、授業とかクロボとかで、いろいろとご協力いただきましてどうもありがとうございました。そしてお疲れ様でした。

あと来年度もゲストとして時々お越しいただけるということで、ますますのご健勝をお祈りしておりますので、お待ちしております。これからもどうぞよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

齋藤・原

ありがとうございました。

堤

ありがとうございました。

本当に原先生と齋藤先生には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に花束を渡したかったです。

齋藤

いっぱいいただいています。気持ちで。

堤

では最後に、地域交流研究センターの副センター長にあたる内山先生の方から、閉会挨拶をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

内山

学校教育学科の内山でございます。地域交流研究センターの副センター長を拝命しております。第17回地域交流研究フォーラムの閉会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。まずは会の持ち方を、急遽オンラインに変更したにも関わらず、本日はたくさんの皆様方にご参加いただきまして誠にありがとうございます。また、長い間、地域インクルーシブ教育に携わり、今日の議論全般を非常に有意義なものにいただきました。パネリストの齋藤淑子先生、それから原まゆみ先生、そしてファシリテーターの堤先生や、会の運営に携わってくださった教職員の皆様、改めまして心よりお礼申し上げる次第です。どうもありがとうございました。

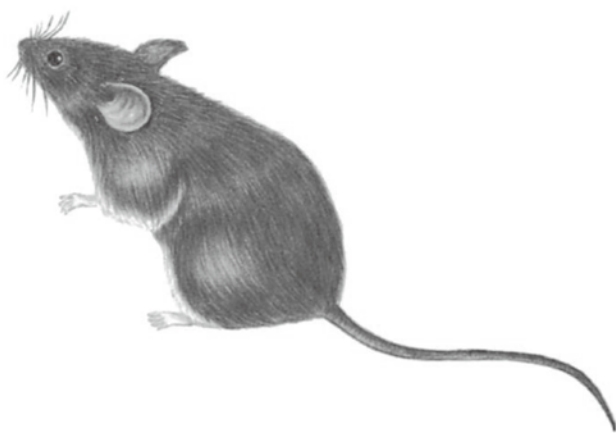
さて今回の地域交流研究フォーラムは、「大学×地域の可能性」というテーマで開催をさせていただいたわけですが、齋藤淑子先生からはクロスボーダープロジェクトのご実践につきまして、また、原まゆみ先生からはキャリアデザインワークのご研究につきまして、これ

までの取り組みをご紹介いただきまして、ご参加いただいた皆様からのご意見ご質問など、非常に熱心な、そして内容の充実したものになったかと思えます。地域におけるこのテーマがいかに重要なものであるかということについても改めて実感させていただきました。齋藤先生と原先生には、本学の特任教授としてこれまで地域交流研究センター、それから学生とも共に大変お世話になりました。改めてお礼申し上げます。これからの先生がたのご活躍を祈念いたしますとともに、両先生とは今後の活動をご一緒できる予定でございますので、今後ともよろしく願い申し上げたいと存じます。並びに本日ご参加の皆様方におかれましても、地域や各団体におきまして、本日の議論の成果の数々をぜひ行かしていただきましてご活躍いただければと思っております。

最後になりましたけれども今回の開催にあたりまして、格段のご尽力をいただきました都留文科大学特別支援学校教職課程委員会の皆様をはじめ、多くの関係者の皆様に御頃より感謝を申し上げまして、閉会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

堤

ありがとうございました。これで閉会したいと思います。



Armi. W

Ⅲ - 2. 各種講座の開催

Ⅲ - 2 - 1. 都留文科大学現職教職員教育講座

講座の趣旨

令和3年7月26日に、都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」を開催した。この講座は、山梨県総合教育センターが開催している「中堅教諭等資質向上研修（10年経験者研修）」の選択講座として、同センターとの共催で例年実施しているもので、平成30年度より、午前の部に『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』、午後の部に『道徳性の涵養』の2講座を開講する形で実施している。

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症防止のため人数を制限し開催した。午前の部を学校教育学科の堤英俊准教授、午後の部を前年度に続いて教職支援センターの宮下聡特任教授に担当していただき、県内各地の小中学校及び高等学校の教員から、午前の部40名、午後の部40名が受講した。

日程と内容

日 時 : 令和3年7月26日(月)

会 場 : 都留文科大学本部棟3階大会議室

9時40分～10時	午前の部 受付
10時～12時	『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』 講師：堤 英俊（学校教育学科准教授） 内容：全校種の教員を対象に、特別な配慮の必要な児童生徒の特徴と、ユニバーサル・デザイン等の利用が、普通の児童生徒にもわかりやすい授業となることについて。
12時～13時	休憩（昼食）
12時40分～13時	午後の部 受付
13時～15時	『道徳性の涵養』 講師：宮下 聡（教職支援センター特任教授） 内容：全校種の教員を対象に、道徳性とは、その涵養の方法等について、また、学習指導要領の目指すもの等について。

(文責：事務局)

Ⅲ－２－２．都留文科大学子ども公開講座

「子ども公開講座」は、都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業との連携により、本学の市民公開講座の一環として、平成25年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休み・冬休みの期間や休日に、主として大学内を会場として開催されている。

令和3年度は7月から11月にかけて6つの講座を企画し、すべてを開催することができた。その状況は下記の通りである。

令和3年度子ども公開講座参加人数一覧

※参加者数には、保護者及び引率指導員等を含む

日程	講座タイトル	講師名	実施場所	参加者数
7月22日(木) 13:30～15:00	「ユーチューバーになろう」 ～アイパッドのむかし話 チャンネル～	野中 潤	5号館	25名
7月23日(金) 14:00～15:30	「ロンドンオリンピック選 手と走ろう！」 —佐野夢加かけっこ教室」	佐野夢加	体育館	19名
7月24日(土) 9:45～12:15	「木を使って工作しよう！」	竹下勝雄 青木宏希	美術棟	15名
7月25日(日) 9:45～12:15	「陶芸にチャレンジ」	山本直紀 小俣英彦	美術棟	14名
7月31日(土) 9:45～11:15	「ドライアイスのふしぎ ～やさしい科学実験～」	山田暢司	自然科学棟	13名
11月20日(土) 10:00～11:30	「自然とのふれあい」	北垣憲仁	大学周辺の森	15名

来年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

(文責：事務局)



Armi. W

Ⅲ－３．学部共通科目の開講

(1) 「地域交流研究Ⅰ」

令和3年度の地域交流研究Ⅰは履修生約80名、地域交流研究Ⅲは約90名と大人数でスタートした。

コロナウィルス感染症の影響を受けつつも、Ⅰ、Ⅲともに混乱なく授業を進めることができた。

1. 地域交流研究Ⅰ

地域交流研究Ⅰは、地域交流研究についての概念、理念を把握し理解することに主眼をおいた。

4月から6月にかけての講義では、地理学や人文地理の文献に依拠して「地域」の概念を整理した。これを踏まえて「地域研究」の基本枠組みをおさえ、「地域」が行政枠にとどまらない、重層的複合的かつ可変可能な枠組みであることを理解してもらうよう努めた。「交流」については「移民」を現象としてとりあげ、移住や移民に伴う様々な交流の存在および地域の変容について講義を展開した。

6月以降は講義と平行して、履修生が各自の関心に沿って地域交流事例を調査し、報告書を作成した。その後5名程度のグループを形成して、各自が作成した報告書をグループ内で読み合い、講評する機会を設けた。履修生が地域交流の調査対象にした地域は、下表にあるように国内のみならず海外に及び、着目点も非常にバラエティーに富み、興味深いものになった。

	着目した事象や問題、フォーカスした交流事例および地域
国内	<p>地域・地域社会形成、地域の課題解決： エゾシカを地域資源とする地域の有効活用事業（釧路）、子ども会育成連合会の取り組み（札幌）、地域水田農業ビジョン・農泊体験（花巻）、都市計画マスタープランへの市民参加（川崎）、外国人市民共生審議会・外国人サポート事業（浜松）、SDGs 未来都市プロジェクト（姫路）、三原市まち・ひと・しごと創生総合戦略（広島）、隠岐島前教育魅力化プロジェクト（島根）、高校魅力化・活性化事業（津和野）、異国の文化の影響（神戸）、米軍基地（沖縄）、他</p> <p>自治体間交流： 富良野市と西脇市、青森弘前市とフランスヴァドス県ブーヴロン・アン・ノージュール、横浜市と道志村、他</p> <p>観光、イベント： 伝承館・サンマまつり（岩手県大船渡市と陸前高田市）、北上展勝地さくらまつり・アラド楽士市（北上川）、ジオパークプログラム（伊豆）、焼津さかなセンター（焼津）、能登里山海道の無料化（金沢）、伝統産業（京都）、瀬戸内国際芸術祭（小豆島）、MAZDA Zoom-Zoom スタジアム（広島）、他</p> <p>都留および郡内地域： 甲斐絹座（企業間ネットワーク）、「御師」を介した地域交流の今昔、他</p> <p>その他： ブラジル信濃村（長野・ブラジル：アリアンサ移住地）、阿部共実の作品群（神戸、ニュータウン）、ケニア人留学生（ケニアー日本）</p>

海外	インドネシア（植民地政策）、オーストラリア（海上貿易交流、アボリジニ文化、多文化主義）、韓国（済州島の自文化形成）、シンガポール（多文化共生）、バンコク（国際交流）、中国（高齢者支援、海外移民）、マダガスカル（東南アジアとの繋がり）、エチオピア（コーヒーセレモニー）、アラスカ（先住民）、ハワイ（日本人移民）、アメリカ（留学）、イスラエル（紛争解決支援）、エジプト（オアシス、宗教）、イタリア（移民）、フィンランド（経済政策、居住政策）、他
----	--

（2）「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きもの地図を作る」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

2021年は対面授業であったため、教室の机の数から受講生の人数を20名程度に調整した。20名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミ、カエル類の調査を実施した。6班（1班は3～4名ほど）にわかれて調査をするが、例年、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。

生きもの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

野外での調査を通して調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちが行なった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。

2021年は、2020年に実施できなかったカエル類の調査をおこなえた。ツバメ類やハルゼミについては、これまでの結果と大きな違いはなかった。しかし、カエル類の分布調査では、トノサマガエルの確認箇所が減少傾向にあった。調査対象としたカエル類は水田で見られるものがほとんどであるため、確認箇所の減少は土地利用の変化によるものであろう。トノサマガエルは個体数の減少が著しい種であり、環境省と山梨県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種となっている。なお、山梨県のレッドデータブックでは、県東部からの本種の生息記録は記載されていない。

今後は希少種や外来種の分布状況についても調査を行ない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

（文責：西 教生）

（3）「地域交流研究Ⅲ」

地域交流研究Ⅲは、都留市域や都留市が含まれている地域の特色を捉え、域内に存在する様々な「地域交流」について学生自らが調べ学習することを主眼としている。令和3年度は

1班6名で15班を編成して講義および調査を実施した。履修生各人の関心事に合致させた班編成が困難だったので教員が振り分けしたが、3・4年次生が途中で放棄するなど、1年次生だけで調査に際して試行錯誤しなければならなかった班も出てしまった。班別作業のバラつきにどう対処するか、今後の課題である。

今年度は地域交流研究調査の対象分野を「教育／学習環境」に絞り、都留市にはどのような教育機会、学習機会、学ぶ／学べる環境があるのか調査してもらった。調査は事前調査と本調査の2段階で実施した。事前調査は、班員同士の連携を促進することを狙って、急遽取り入れたものである。インターネットの情報を中心に教育環境の概要が把握できるよう、調査項目を教員が設定した。

事前調査の結果を中間発表を通して全体として共有した後、各班で班員の関心事をすりあわせて本調査項目を決定、班内で意見交換しつつ調査を進める形式にした。そして班別に調査報告書を作成し発表して再度、全員で情報の共有を図った。

調査と平行して、地域交流研究の視座、調査手法、報告書作成方法など概論的な講義を行った。

令和2年度同様、地域交流研究センター長北垣先生にセンターの設立経緯や理念、活動内容および地域交流研究に関してご講義をいただいた。

事前調査項目と本調査項目については以下の表のとおりである。

本調査では、小学生を中心に学校外での学びの場を調査対象にして地域社会との関わりについて考察した班が多かった。身近な活動かつ内容が把握しやすいことから、文大生が関わっている活動についてとりあげた班もあった。教育機関や教育支援活動に着目だけでなく、様々な交流活動の場である施設の分布に着目した班や、防災をテーマにした班、成人を含めた学びの場について考察した班などもあり、都留市の学びの場の特徴を把握するための幅を広げることができた。

事前調査項目	<ul style="list-style-type: none"> *学校等：保育園・幼稚園、初等教育、中等教育、高等教育、本学以外の大学 *学校外教育：学習塾、社会人教育・生涯学習、カルチャークラブ、子ども支援活動、学習支援団体 *都留市近隣地域：中等・高等教育機関
本調査タイトル	<p>「谷村町における小学生の放課後の使い方」、「小学生に焦点を当ててみた！都留市の特徴を活かした学びのあり方」、「都留市の人口から見るこどもに関わる学校外教育の特徴と課題」、「小中学生の放課後の時間の過ごし方と地域住民・多世代間の交流」、「都留市の中学生の授業外学習」、「文大生が関わる学校外活動について」、「文大生が手がける都留市における学びの場」、「東桂地区におけるつるっ子プロジェクト実行委員会の役割」、「都留市における特別支援の取り組みについて」、「落ちこぼれをつくらない教育」、「世代内、世代間の交流からみる都留市の学びの場の特徴」、「都留市のふるさと教育」、「都留市の防災教育」、「地区別文化施設別交流活動」、「山梨大学学生による地域興しと都留市との比較」</p>

令和4年度の活動の予定については、コロナウィルス感染症対策に引き続き留意しながら、令和3年度の方針を継続する予定である。

地域交流研究Ⅰについては、移民現象に加えて地域活性化に取り組む事例をとりあげて、地域交流に関わる人々について理解の促進をはかるつもりである。

地域交流研究Ⅲについては、神社や寺院仏閣を契機にした交流をテーマにして、グループ別に調査を実施し、都留市域の特徴を把握していく予定である。

(文責：重富恵子)

(4) 「地域交流研究Ⅳ」—地域の自然を観察し記録する—

1. 授業の概要

「地域交流研究Ⅳ」は、2020年度まで地域の自然や文化をテーマとした観察・取材をおこない、それを記事にしてまとめるという実践的な授業を展開してきた。地域での体験を言語化し、互いに記事を読みあい、最終的には冊子にして市民に届けることで学生の地域についての学びの深化だけでなく市民との自発的な交流を生み出すことを目標とした授業で、地域交流研究センターの機関誌である『フィールド・ノート』の実践を参考とした。

2021年度から文学部3学科横断履修モデルの1科目として位置づけられたこともあり、本授業では「地域を観察し記録する」という従来の目標は保ちつつ、富士山周辺の動物を含む地域の身近な自然の理解をテーマとした授業構成とした。特に全国的に農業や林業など環境面だけでなく社会的な問題にもなりつつあるニホンジカやイノシシなど大型哺乳類との共生の問題などを理解するには、哺乳類の行動・生態など基本的な理解が必要となる。そこで、本授業では全学科からの受講があるため、卒業後に身近な自然についての理解を活かせるよう、①哺乳類の生活の痕跡(足跡や食べ痕)などから動物の生態や行動を読み取る手法を学び、自然との共生のあり方や富士山周辺の自然の現状について実地に学ぶこと、②身近な自然をテーマとした教材化について学ぶこと、を目標とした。地域交流研究センターの特徴でもあるフィールドでの学びを授業でも活かすために、できる限りキャンパス周辺の自然にじかに触れ、観察する野外でのフィールド・ワークを取り入れた。

授業後、学生からは次のような感想が寄せられた。

- ・ためになる知識を多く得ることができた
- ・外に出る機会は少なかったですが、実物を持ってきてくださり、特にビーバーの歯やモグラなどは初めて見たので刺激的でした
- ・生物を大切にしようと思えた
- ・実際に外に出ているいろいろな生きものを見ながら知識を得ることができてほんとうに楽しく授業を受けていました。新しい発見、知識、考え方を将来に活かしたいと思います
- ・この授業を受けなければ、近くの山を散策する事はなかったと思うので、貴重な体験をさせていただきました。とても楽しかったです
- ・自然に対する考え方など自然と共存するための考え方や知識を得ることができた
- ・都留の新しい部分を知る事ができました。いつも横を通るけど何も思わないし視界にあまり入っていないものは沢山あるのだということに気づかされる授業でした。他の大学とは違い、都留文科大学は自然がすぐそこにあります。そのことを活かしてあと2年、たくさんの生き物の発見をしていきたいと思います
- ・今まで知らなかったことを多く知れた授業であったと同時に、物事に対する考え方など非常に多くのことを学べた講義でした。今までにない視点で物事を考え、これからの生活に大いに活かすことができると思います。

(文責：北垣憲仁)

IV. 地域貢献活動

IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム

概 要

南都留地域教育フォーラムは、「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、この地域の教育関係者が一堂に集まり、『連携活動』『交流活動』を軸に、報告と意見を述べあう場として開催されている。毎年、教育委員会・校長会・教頭会のほか、各学校・幼稚園・保育園やPTA及びPTA連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加者によって、様々な立場からの意見交換を行い、今日的な課題への対応や解決を目指す機会となっている。

今年度は「新しい結びつきで広がる教育の可能性」をテーマに書面開催と共に、実践事例提案をしていただいた3団体（「22世紀を生きる子どもを今どう育てるか～未来を担う子どもたちに必要な「力」を育むための実践・挑戦～：開地保育園」「地域で育てる～地域で育ち、地域で生きる子どもの育成～：かえる舎」「行政機関としての学校教育への支援～行政・専門機関・学校・保護者・地域との連携を通して～：富士河口湖町立教育センター」）と都留文科大学鈴木健大氏と富士吉田市立教育研修所村松悟所長を交えて、「連携による成果と課題」等を題材にトークセッションを行った。

令和3年度は、10月29日（金）に配信型で開催した。

令和3年度「南都留地域教育フォーラム」全体会テーマ一覧

全体会 連携が生む 地域社会の力で 子どもたちを育む	1 22世紀を生きる子どもを、今どう育てるか ～未来を担う子どもたちに必要な「力」を育むための実践・挑戦～ 開地保育園 延長 亀澤 正隆
	2 地域で育てる ～地域で育ち、地域で生きる子どもの育成～ 特定非営利活動法人かえる舎 代表理事 斎藤 和真
	3 行政機関として学校教育への支援 ～行政・専門機関・学校・保護者・地域との支援を通して～ 富士河口湖町立教育センター 所長 梶原 斉

（文責：事務局）

Ⅳ－２．都留市放課後子ども教室事業

１．「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。令和2年度は6つの小学校区（谷村第二、東桂、宝、禾生第一、禾生第二、旭）を中心に、学校の図工室や、各地区のコミュニティセンター等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

２．今年度の活動状況

地域交流研究センターでは、都留市教育委員会からの依頼を受けて、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。平成27年度までは、個々の活動ごとに募集をかけて学生が直接申し込む形式だったが、申し込みの多い活動とまったくない活動に分かれてしまい、調整が難しかった。

そこで平成28年度からは、センターが活動指導員として参加を希望する学生をあらかじめ募集して登録を行い、申告してもらった特技や趣味等から、個々の活動の際に教育委員会が適当な学生に直接参加を依頼する、という方法を取るようになった。

今年度は58名の学生から参加申し込みがあり、放課後子ども教室事業で行われた181回の活動のうち、45回の活動に延べ194名の学生が参加し、子どもたちをサポートした。

令和3年度放課後子ども教室学生参加状況一覧

「三吉子ども体験教室」（谷村第二小学校）

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月17日	自由遊び 絵しりとり	谷二小体育館	2名
2	7月17日	つる子どもまつりがやってくる	谷二小グラウンド	14名
3	7月22日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
4	7月23日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう	都留文科大学	2名
5	7月24日	文大子ども公開講座 木を使って工作しよう！	都留文科大学	5名
6	7月25日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	3名
7	7月31日	文大子ども公開講座 ドライアイスの不思議	都留文科大学	4名
	合計①			32名

「桂子ども教室」(東桂小学校)

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	5月16日	科学遊び～紫キャベツを使った実験～	東桂コミュニティセンター	3名
2	6月27日	自由開放(輪ゴム、ビニール、紙コップを使った工作)	東桂コミュニティセンター	4名
3	7月11日	にじいろきょうしつ(文大生と宝さがし)	東桂コミュニティセンター	10名
4	7月21日	ゲートボール雨天中止のため自由遊び	東桂小体育館	2名
5	7月22日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう!	都留文科大学	2名
6	7月23日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう	都留文科大学	2名
7	7月24日	文大子ども公開講座 木を使って工作しよう!	都留文科大学	5名
8	7月25日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ!	都留文科大学	3名
9	7月30日	絵画 増田展に向けた絵画の制作	東桂小学校	1名
10	7月31日	文大子ども公開講座 ドライアイスの不思議	都留文科大学	4名
11	10月24日	ものづくり クラフトコースター ビーズの小物作り	東桂コミュニティセンター	2名
12	10月24日	ものづくり フェルトマスコット作り	東桂コミュニティセンター	2名
13	12月1日	ものづくり プラバンキーホルダーを作ろう	東桂コミュニティセンター	4名
14	12月11日	遊び つるっ子探検隊～逃走者を捕まえる～	東桂小学校周辺	9名
15	1月11日	遊び 自由開放～パステルアート、ミサンガ～	東桂コミュニティセンター	2名
	合計②	55名		

「宝っ子クラブ七里」(宝小学校)

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	6月30日	遊び 輪ゴムを使って簡単工作	宝小体育館	4名
2	7月22日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう!	都留文科大学	2名
3	7月23日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう	都留文科大学	2名
4	7月24日	文大子ども公開講座 木を使って工作しよう!	都留文科大学	5名
5	7月25日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ!	都留文科大学	3名

6	7月29日	アート 芸術はばくはつだ！	宝小図工室	2名
7	7月31日	文大子ども公開講座 ドライアイスの不思議	都留文科大学	4名
8	10月20日	ものづくり ミサガ作り	宝コミュニティセンター	5名
9	11月6日	収穫祭 収穫の儀式、焼き芋	畑	1名
10	11月15日	ものづくり ビーズ小物作り	多目的ホール	2名
11	11月29日	ものづくり プラバン小物作り	多目的ホール	1名
12	11月30日	ものづくり プラバン小物作り	多目的ホール	1名
13	12月8日	遊び ストローを使って簡単工作	宝小体育館	2名
14	12月15日	遊び 袋を使って簡単工作	宝小体育館	1名
15	1月7日	遊び 宝の山の番長と遊ぼう！ 宝のまちをお散歩しよう！	宝のまち	4名
16	1月12日	ものづくり 都留文大こまつり規格	多目的ホール	2名
	合計③			41名

「禾一わくわくクラブ」(禾生第一小学校)

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	7月22日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
2	7月23日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう	都留文科大学	2名
3	7月24日	文大子ども公開講座 木を使って工作しよう！	都留文科大学	5名
4	7月25日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	3名
5	7月25日	盆踊りとお楽しみゲーム	保寿院い〜ばしょ	4名
6	7月31日	文大子ども公開講座 ドライアイスの不思議	都留文科大学	4名
7	10月18日	パステルアート 1年生	禾生コミュニティセンター	2名
8	11月13日	つる子どもまつりがやってくる！ 旭小合同	禾一小グラウンド	18名
9	11月16日	ばんちょと散歩 3年生	禾一小周辺	2名
10	12月10日	ばんちょと散歩 1・2年生	禾一小周辺	3名
11	12月12日	つるっ子探検隊 文大生冬の大運動会 禾二小合同	禾一小体育館	9名
12	1月11日	プラバンで新年を迎えよう	禾生コミュニティセンター	2名
13	1月12日	毛糸でポンポン	禾生コミュニティセンター	2名
	合計④			58名

「禾二っ子クラブ」(禾生第二小学校)

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	7月10日	つる子どもまつりがやってくる！ 文大生と一緒に	禾二小グラウンド	3名
2	7月22日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
3	7月23日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう	都留文科大学	2名
4	7月24日	文大子ども公開講座 木を使って工作しよう！	都留文科大学	5名
5	7月25日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	3名
6	7月31日	文大子ども公開講座 ドライアイスの不思議	都留文科大学	4名
7	11月12日	ばんちょと外遊び	禾二小グラウンド	3名
8	11月19日	ばんちょと散歩 1年生	禾二小周辺	2名
9	12月12日	つるっ子探検隊 文大生冬の大運動会 禾一小合同	禾一小体育館	9名
	合計⑤			51名

「旭子ども教室」(旭小学校)

	開催日	活動内容	活動場所	学生
1	5月26日	さつまいもの植え付け	旭フォーム	5名
2	6月23日	プラバン工作	盛里コミセン別館	4名
3	7月7日	じゃがいも掘り	旭フォーム	5名
4	7月22日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
5	7月23日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう	都留文科大学	2名
6	7月24日	文大子ども公開講座 木を使って工作しよう！	都留文科大学	5名
7	7月25日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	3名
8	7月31日	文大子ども公開講座 ドライアイスの不思議	都留文科大学	4名
9	10月27日	読み聞かせと俳句かるた	盛里コミュニティセンター別館	5名
10	11月8日	さつまいも掘り 毛糸ポンポン	旭ファーム 盛里コミュニティセンター別館	2名 2名
11	11月13日	つる子どもまつりがやってくる！！！！	禾一小グラウンド	18名
12	11月24日	大根掘り	旭ファーム	5名

13	11月26日	毛糸ポンポン	与繩営農センター	1名
14	12月24日	しめ縄作りと自由遊び	与繩営農センター	1名
	合計⑥			64名

(① + ② + ③ + ④ + ⑤ + ⑥) 合計⑦	301名
-----------------------------	------



Aimi. W

Ⅳ－３．文大ボランティアひろば

１．文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば⁽¹⁾（通称：ぼらひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成20年度から1カ月に1回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合を行っている。昨年度から引き続き令和3年度ボランティアひろばは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため開催できなかった。

昨年度に社会福祉協議会と連携会議を重ねて協定を締結した。今年度は、来年度からのボランティア事業再始動に向けて社会福祉協議会との連携会議を行い、「学生ボランティア登録」のシステムを作った。

内容は、地域交流研究センターに学生ボランティア登録をすることで、事務局から随時ボランティア募集のお知らせや、ボランティア関連の情報、ボランティアひろば開催のお知らせが届く。学生は参加したいときに申し込みを行い、社会福祉協議会への登録を許可した学生については、社会福祉協議会のデータベースにも登録するという流れになっている。社会福祉協議会から紹介されるボランティアや養成講座なども、事務局が一括してお知らせすることとなった。

来年度からのボランティアひろばは、1カ月に1回のペースで昼休みの時間内30分で開催する予定で準備をしている。内容は、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、ボランティア募集の告知、ボランティア参加者の活動報告が中心であり、登録者同士の交流する場としての役割も持っている。登録制にしたことで、ボランティア募集をメールで一括して行えるようになり、登録者に平等に告知ができるメリットがある。また、相互の活動に触れて刺激を受け合えることや、これらを通じて活動が活性化されるのではないかと考えている。

２．今後の課題

来年度からは、文大ボランティアひろばの再始動や社会福祉協議会と連携し、ボランティア事業に力を入れて取り組んでいく予定である。

（文責：事務局）

(1) 文大ボランティアひろば及びいこいのひろばについては、地域交流研究年報第7号に詳しく掲載されている。

Ⅳ-4. 地域交流研究センターサテライト

1. 地域交流研究センターサテライトについて

平成 25 年度に都留市まちづくり交流センター内に設置された都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）である。サテライトでは地域の方々に大学をより身近に感じてもらうことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

2. 今年度の活動状況

サテライトの主な活動は、大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などである。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、予定していた様々なイベントや活動が中止になった。今年度の主な活動は、以下の通りである。

- ・放課後子ども教室学生スタッフ募集
- ・はつらつ鶴寿大学ボランティアスタッフ募集【半分中止】
- ・本学の社会調査実習 A を受講している学生から鶴寿大学に参加している高齢者の方々と、学生ボランティアへの調査依頼とサテライト前担当者（現：地域交流担当と情報センター担当）とサテライト担当にアンケートとインタビュー依頼
- ・本学の地域交流研究Ⅲを受講している学生から地域交流研究センターやサテライトについてインタビュー依頼
- ・社会教育主事資格取得コース社会教育実習生の受け入れ依頼

都留市中央公民館主催「はつらつ鶴寿大学」における学生ボランティアの募集を行ない、8名の学生の応募があったが、新型コロナウイルス感染拡大のため開催の半分は中止となった。再開後も、まちづくり交流センターのガイドラインに14日以内に感染拡大地域へ行った場合は参加できないという規定があり、参加自体できない学生もいた。参加できた学生は2、3回のみのお出でにとどまった。

本学学生から、鶴寿大学学生と学生ボランティアへの調査依頼があり、鶴寿大学学生は生涯学習課にて対応。学生ボランティアには google フォームを送り、回答してもらった。サテライト前担当者（現：地域交流担当）とサテライト担当にアンケートとインタビュー依頼があった。元担当者（現：情報センター担当）にも話を聞きたいということで、元担当者にはアンケート記入依頼し、前担当者とサテライト担当でインタビューを受けた。

本学の地域交流研究Ⅲを受講している学生から地域交流研究センターやサテライトについてインタビュー依頼があり、地域交流担当事務局が対応した。

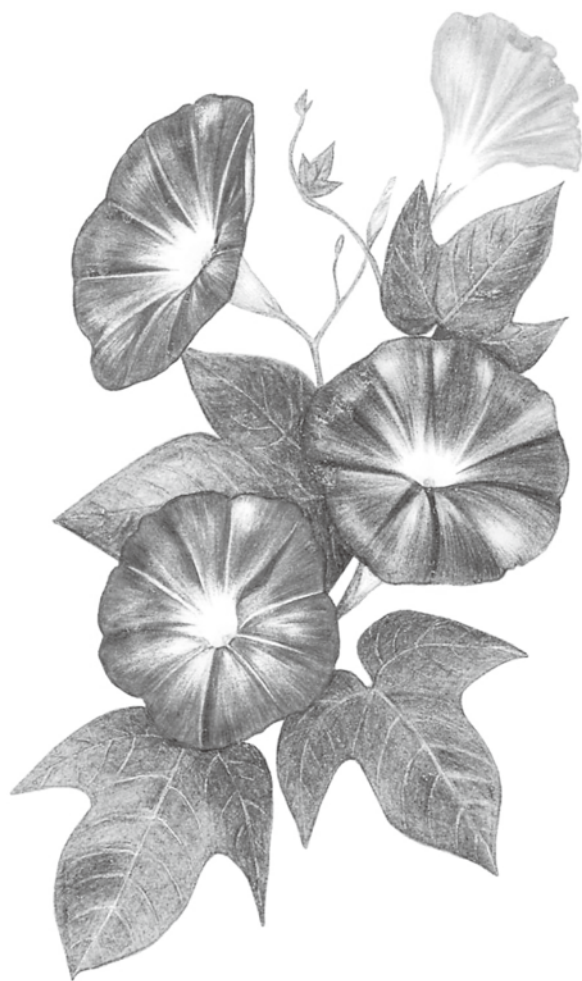
社会教育主事資格取得コース社会教育実習生の受け入れ依頼があり、地域交流研究センターで受け入れ、各イベントのチラシ作成や準備を行ったが、新型コロナウイルス感染拡大により、「第1回文大名画座」と「第2回文大名画座」は中止、「地域交流研究フォーラム」当日の実習は中止となった。1月29日「つるぶんカフェ」は Zoom にて実施した。

今年度は、地域交流研究センターの Twitter が開設され、数は少ないが、地域のイベントや活動を掲載した。地域交流研究センターの活動や地域での活動の様子は、この Twitter やホームページで紹介されている。また、大学を市民に周知するための活動として、大学のイベントの案内やポスターをまちづくり交流センターに掲示し、フィールド・ノートの配架を行った。

3. 来年度の活動について

学生・市民から寄せられる相談・依頼への柔軟な対応を目指し、学生と市民が交流のできる場を増やす活動を行なう。そのためには、まちづくり交流センターで行われている「暮らしに役立つみんなの広場」に講師として、又は地域と交流してくれる学生の参加者を募集する予定である。

(文責：事務局)



IV-5. 「学級づくりの向上をめざす実践講座」の活動報告

令和3年度は、4月から11月まで全7回の開催を予定していた。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大のため9月（第5回）は休止となり、1月に延期することになったが、あいにく1月も学内立ち入り制限が行われたため、やむなく中止となった。最終的には6回の開催にとどまった。

第1回 4月24日（土） 渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）

学び鍛え合う個と学級を支える一教師の自己開示と感受性

第2回 5月22日（土） 金勝武鑑（中学校時間講師）

誰もが安心して間違い、「違い」から学べる学級をつくる

第3回 6月26日（土） 小林一彦（谷村第二小学校教諭）

自分たちで問題解決できる力を一「学級集団づくり」の理論のもとに

第4回 7月24日（土） 北浦貴之（東桂小学校教諭）

「こどものてつがく」と学級集団—相互理解から共同体へ

第5回 9月25日（土） 延期・中止

第6回 10月23日（土） 雨宮 綾（後屋敷小学校教諭）

全ての子どもたちが輝き、認め合える道徳教育で学級をつくる

第7回 11月27日（土） 土屋賢一郎（南アルプス子どもの村小中学校）

学校って何？ 私学の視点から見た学級・学校の役割と子どもの可能性

令和3年度は、計108名の参加者があった。毎回、現職の教員のみならず、本学の学生も参加している。学生にとっては、大学の講義だけでは分からない学級づくりの具体的な方法や事例を学べるだけでなく、現職の先生方とも身近に交流できるということが魅力となっている。

令和4年度は、6回にわたって開催される予定である。

第1回 5月28日（土） 渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）

学級づくりの基礎基本から、主権者教育の最前線につなげる試み

第2回 6月25日（土） 金勝武鑑（中学校時間講師）

幾度も問い直し立ち返る、教師の「原点」とは何か

第3回 7月23日（土） 染矢晋太郎（上野原西中学校教諭）

教師のボキャブラリーでつくり出す、育て合う言葉に満ちた教室

第4回 9月24日（土） 細越真梨子（上野原小学校教諭）

主体性こそ自分らしさ！—安心して受け止め合える学級への挑戦

第5回 10月22日（土） 藤森啓太（泉小学校教諭）

「学びのホンモノ化」で教師と子どもが共に目指す市民性

第6回 11月12日（土） 渡邊恭子（勝山中学校教諭）

叱る、褒める、認める—個人と集団のモチベーションを引き出す

（文責：鶴田清司）

IV - 6. 市民公開講座

地域交流研究センターの部門活動として実施したものはⅡ。各部門の活動で、また現職教員養成講座と子ども公開講座についてはⅢ。インターフェイスとメディアの活動において報告したため、ここではそれ以外のものについて報告する。

○市民公開講座「星空講演会」

【日程・会場等】

日 時：令和3年6月11日（金）18:15～19:00

会 場：自然科学棟 S1 教室 参加者：42名

【講座の概要】

6月11日（金）に本学非常勤講師・国立天文台特別客員研究員の古荘 玲子氏による市民公開講座「星空講演会」を開催した。

当日は、本学生及び一般の方の42名の参加がありました。

太陽系の星々を中心に彗星に関することや、2017年、2019年と立て続けに発見された太陽系小天体を含めた天文学の解説を行った。

【参加者の感想】

- ・星が好きで、講演に参加させていただきました。彗星は東方が先に見つけられる、とか名前を付けられるのが先着3名という部分が面白かったです。まだまだ研究課題がたくさんということでしたが、だからこそ奥が深いし、興味深いと思いました。今年12月の彗星、楽しみにしています。
- ・あまり彗星の知識がない自分にも分かりやすく、約1時間の講義を夢中で聞いてしまった。10月の天文台での講義もぜひ聞きたいと思った。
- ・非常に興味深いお話を聴くことができ、貴重な体験をすることができました。幼少期に星座の神話の本を読んだことがきっかけで、星空を見るのが好きになりました。ですが、学校の理科の授業で習っただけだったので、専門的な知識はほとんどなく、聴くお話全てがとても新鮮でした。また、お話を聴いただけで星空を研究する面白さを少し感じることができ、研究されている方々が羨ましくも思いました。ありがとうございました。
- ・専門的なことは、なかなか理解できませんが、都会では夜空に興味を持てませんでした。都留でもキレイとのことでしたので、感心を持って空を見るきっかけになりました。ありがとうございました。
- ・ただの“星空”ではなく、彗星という具体的な且マイナー寄りなモノを取り上げての講演会はなかなかないのでとても面白かったです。知識として新たに学ぶものがありましたし、天文学自体にさらに興味惹かれました。

○市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」

共催：都留市教育委員会

オリンピック・パラリンピックホストタウン事業

【日程・会場等】

日 時：令和3年7月25日（日）9:30～11:30

会 場：都留文科大学体育館 参加者：30名

講 師：佐野夢加（本学特任講師）

【講座の概要】

7月25日（日）、都留市内の小学生を対象とした市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」を開催した。

本講座は、本学特任講師でロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加氏を講師に迎えて、平成28年度から毎年開催しているもので、今回は本学陸上部の学生2名が補助として参加した。

参加者は小学校1年生から6年生までの30名で、ウォーミングアップのランニングから始まり、ラインの上を走るライン走や、マーカー（小さな平べったいコーン）を利用したマーク走などによって、走るコツを身に着ける練習を行った。

【参加者の感想】

- ・足がはやくなるように今日ならったことをたくさんれんしゅうして足をはやくしたい（3年男子）
- ・たのしかったからまたやりたいです。（1年男子）
- ・親と子のじゃんけん対決が一番楽しかった、と子供が言ってます。私は帰って早々体が痛いくらいでした。この様なイベントが沢山出来る様な生活になると良いと思います。ランナー体験もさせてもらって、ありがとうございました。（保護者）
- ・遊びを取り入れながら体を動かさせてとても良かったです。身近にすごい選手がいて子供も驚いていました。ありがとうございました。（保護者）

○市民公開講座「湧水さんぽ」

【日程・会場等】

日 時：令和3年11月6日（土）9:40～17:00

参加者：33名

【講座の概要】

11月6日（土曜日）に地域交流研究センター、自然共生研究部門、内山美恵子教授（学校教育学科）による都留市十日市場・夏狩湧水群と忍野村忍野八海を見学する市民公開講座「湧水さんぽ」が開催した。今回は、日本地下水学会市民コミュニケーション委員会と共催ということもあり、学会員の皆さんにはガイドを務めていただいた。当日は県内外から多くの方々（33名）に参加してもらい、4班にわかれ、午前は菊池わさび園の溶岩と湧水、太郎次郎滝の溶岩と湧水、十日市場の湧水を見学、溶岩の話や湧水のしくみなどを簡単な実験

も交えて楽しく見学した。午後からは、バスに乗り忍野八海を見学、出口池からの湧水など学会員の方とともに見学した。

【参加者の感想】

- ・初めての参加だったが、大変有意義であり楽しかった。今回は地元の都留だったが、9割方行ったことがないところで勉強になった。この機会に次回は他の地域のさんぽに参加したいと思いました。都留に住んでいても、文大の中に入ったこともなく昼食時に学生食堂で入れたこともうれしかった。なお一層、文大が身近に感じました。
- ・たくさんのスタッフの参加があり、ありがとうございました。各場所ごとの説明の方がおられ、待っておられたことに驚きました。見学した場所は何回か来たことがあります、ただ「きれいだね」とか「めずらしいね」と思うだけでしたが、やはりていねいな説明があることが私にとってとても興味を持ちます関心を持つようになりました。ある程度の知識はありましたが、もっと掘り下げて、調べてみようと思うようになりました。ありがとうございました。
- ・地質や地理は全く不勉強だったので、実験や幾つかの実例を見られて湧水のメカニズムをよく理解できた。また、溶岩のへりの場所まで歩いてきて、富士山の噴火の威力の一端も感じられた。氷河期時代に雪をまきこんで流れた泥流の中の石が河原石などと異なり角ばったまうめこまれているというのが当時の勢いを感じられて1番おもしろく感じた。今後は人為的な痕跡だけでなく、自然の観察もしながら散策していきたい。

○市民公開講座「星空観察会」

【日程・会場等】

日 時：令和3年11月11日（土）18:15～19:15

会 場：自然科学棟 S6 教室 屋上・天文台 参加者：10名

講 師：古荘 玲子（都留文科大学非常勤講師・国立天文台特別客員研究員）

【講座の概要】

11月11日（木曜日）に、地域交流研究センター主催「星空観察会」を開催した。天候などに左右され、なかなか開催されず3年越しの開催が実現した。当日は寒さが厳しかったが、天候にも恵まれ、自然科学棟にある天体望遠鏡を使い、代表的な惑星である月、木星などを中心に観察をすることができた。コロナウイルス感染症対策のため、定員が10名となったが、参加者には好評で、季節ごとの開催にしてほしいとの要望も出るほどだった。

【参加者の感想】

- ・初めて木星、土星を見ました。望遠鏡で見るとこんな状態なんだと知りました。月の表面のクレーターをしっかりと見ることが出来、貴重な体験です。ありがとうございました。
- ・初めて大型望遠鏡で星を見ました。説明をききながらでしたので星の様子が理解できました。また、機会があれば参加したいと思います。ありがとうございました。
- ・天気にも恵まれてたくさんの星が見えてよかった。いつも見ていた星が木星と土星だとわかり、一寸感激です。

○市民公開講座「英語であそぼう！」

【日程・会場等】

日 時：令和3年11月13日（土）10:00～11:00
会 場：3号館4階 参加者：10名
講 師：上原（かんばる）明子（学校教育学科教授）

【講座の概要】

昨年度に続いて、学校教育学科の上原明子教授と本学学生による市民公開講座「英語であそぼう！」を開催した。市内の5つの小学校から1年生から6年生、10名が参加し、本学の学生が講師を務める3つの教室を時間を区切って回り、ゲームやクイズに答え楽しみながら英語を学んだ。

【参加者の感想】

- ・英語は習ってきたけど、ここでも英語ができてよかった（2年生）
- ・少し簡単だったので、次はもう少し苗クイズやゲームがしたい。野菜の部屋が一番楽しかった。（5年生）
- ・英語を知れてよかった。楽しかった。（2年生）
- ・一つ一つの部屋にちがうゲームや、おぼえられるようにくりかえし発音練習をしてくれてとても良かったです。（5年生）

（文責：事務局）



Aimi. W

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 「食育つる推進プラン」

申請代表者：学校教育学科 准教授 平 和香子

【目的】

都留市が第6次都留市長期総合計画で策定している「健康増進計画・食育推進計画」(2016～2026年)の重点目標「健康プロジェクトTSURUつる」(旧「食育つる推進プラン」)1～9に基づき、主に最優先課題とされている1. 栄養・食育分野について、学内における学生や地域の人々への食育の周知や活動の支援を大学生が積極的に取り組み、健康増進と食生活の意識改善に取り組むことを検討することを目的とする。

【概要】

都留市食育推進計画の分野別目標である(1)食に関する正しい知識の普及と健全な食習慣を实践(2)食の大切さを理解し感謝の気持ちを育成(3)地産地消の推進と食文化の継承を普及、に基づき、本学学生が市役所や食生活改善推進員の方々にご指導をいただきながら、①大学生向けの減塩・防災料理教室 ②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室 ③市内保育園への食育教室 ④子ども食堂の支援、等に取り組んでいる。

【2021年度の報告】

コロナの影響により、①大学生向けの減塩・防災料理教室 ③市内保育園への食育教室 ④子ども食堂の支援は見送りとなった。②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室は2021年11月に実施されたため、その報告を以下に記載する。

「のびのび興譲館クッキング塾」の参加

日 時：2021年11月27日(土)、12月11日(土)

場 所：いきいきプラザ都留 調理実習室

対 象：塾生(都留市内小学4～6年生)

参加人数：計20名(小学生各回10名、本学学生2名、市役所2名)

内 容：「のびのび興譲館クッキング塾」は、市教育委員会主催の小学生を対象とした料理教室である。毎月1回、主に食生活改善推進員の方や調理師の方を講師として招き、様々な調理を経験することができるため、小学生に人気の教室となっている。活動内容としては、単に調理の技術や知識を伝えるだけでなく、地元都留市で作られている作物を知ることや、昔からの食文化に触れることなど、多くの食経験を取り入れている。これらの経験を通して、生きていく上で最も基本となる食について、子どものうちから関心を深め、生涯にわたって健康で豊かな食生活を実践できる人間を育てることを目標としている。この主旨を踏まえ、年間活動計画のうち、第5回を生活環境科学系ゼミ生が担当した。昨年度は、コロナの影響により密を避けるため、人数を分けて2日間での実施となった。実習内容は、「山梨県以外の郷土料理を作ってみよう」という内容の実習で、岩手県の郷土料理である“ひつつみ”を調理した。“ひつつみ”とは小麦粉を水で練った生地を手で引きちぎって伸ばし、野菜や鶏肉等と一緒に煮

込むすいとんに似た料理である。生地は強い弾力があり、小学生がこねるのに力は必要であったが、楽しみながら実習を体験することができた。また、大学生によるひつつみに関する栄養的な説明や、岩手県に伝わる“ひつつみ”以外の郷土料理の紹介等、食文化に関する食育活動も併せて行った。

<今年度の予定>

今年度もコロナの影響により、現段階での実施予定はのびのび興譲館クッキング塾のみとなっている。状況が落ち着き次第、他の実践の取り組みも再開したいと考えている。

V-2. 谷ニラボ

申請代表者：学校教育学科 教授 山森美穂

協力者：学校教育学科 准教授 平和香子

テーマ：^やに 谷ニラボ ～小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室～

【目的】

①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することである。

【概要】

谷村第二小学校で放課後に小学生を対象とした理科実験教室（通称「谷ニラボ」）を平成23年度からはじめた（27年度は山森の学外研究のため休止）。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①～③の達成を目指す。参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討する（目的④）。同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

【令和3年度の報告】

感染防止の観点から参加人数を限定する必要があるため、第1回（6月16日）は、4～6年生を対象として行うことになった。「しゃぼん玉とドライアイスの実験」と題し、空気より重い二酸化炭素でふくらませたしゃぼん玉の挙動の観察などを行った。別の放課後プログラムと重なったことも影響したのか、参加は8名と少なかったが、二酸化炭素でふくらんだしゃぼん玉が割れるときの様子が、空気ですくませたものと明らかに異なる様子に歓声があがっていた。

第2回（11月17日）では、1～3年生を対象に、「水の中にしゃぼん玉をつくろう」と題し、「逆しゃぼん玉」を作る実験を行った。24人の参加があった。ストローを液に差しこんで、反対側の口を指で押さえて、ストローを引き上げると、ストローの中に液が残る。指を離すとストローの中の液が落ちて、しゃぼん液の中に薄い空気の膜、その中にしゃぼん液

という構造ができ、これが「逆しゃぼん玉」と呼ばれる。子どもたちは、しゃぼん液を落とす高さなどに試行錯誤を繰り返していた。

第3回（1月31日）では、2つの教室で、「ハンドスピナーでジャイロ効果を体験してみよう！（コマも作ります）」というタイトルで行う予定であった。しかし、県内で感染者が急増したため、残念ながら学校での対面での開催は中止となった。材料等をすでに購入していたこともあり、参加を申し込んだ児童24人には、材料と説明資料を配布して、家庭で楽しんでもらうことにした。また、学生が説明を動画として用意し、そのURLを資料に載せることも試みた。事後のアンケートからは、工作の作業自体は資料と動画をもとに理解して、保護者の補助なくひとりで行えた児童が多かったようである。また動画の視聴数は5回と学生の想像より少なかった。

参考：「ハンドスピナーでジャイロ効果を体験してみよう！」

<https://www.youtube.com/watch?v=6GzYRylaG54>



【令和4年度に向けて】

感染防止の観点からも、ひとつの教室で参加する児童数を限る形で実施する予定である。



Aimi. W

付) 2021 年度 (令和 3 年度) 地域交流研究センター担当教員

北垣 憲仁	地域交流研究センター教授	地域交流研究センター長 自然共生研究部門担当
内山美恵子	学校教育学科教授	地域交流研究センター副センター長 自然共生研究部門担当
福島 万紀	地域社会学科講師	自然共生研究部門担当
日向 良和	情報センター准教授	共通教育研究部門 (地域情報教育)
青木 宏希	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域美術教育) 担当
山本 直紀	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域美術教育) 担当
堤 英俊	学校教育学科准教授	地域交流研究センター編集長 共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
原 まゆみ	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
齋藤 淑子	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 (地域インクルーシブ教育) 担当
富永 貴公	地域社会学科准教授	共生教育研究部門 (社会教育) 担当
鈴木 健大	地域社会学科准教授	まちづくり研究部門担当
事務局: 深澤祥邦 関戸聡子 渡邊愛美 赤松優香 (まちづくり交流センター・サテライト)		

2021 年度 (令和 3 年度) 地域交流研究センター運営委員会委員

鈴木 健大 広報委員長
 内山美恵子 学校教育学科
 吉田 恵理 国文学科
 OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri 英文学科
 福島 万紀 地域社会学科
 齋藤みどり 比較文化学科
 Nordström, Johan Karl 国際教育学科
 小澤 初美 経営企画課長
 久保田国雄 市民代表 (まちづくり市民活動支援センター長)

2022年9月30日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電話 0554-43-4341 (代)

印刷所 株式会社 佐野印刷
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-3
電話 0554-43-1611
